

研究紀要

第 27 号

(目 次)

〈論 文〉

式千某年藝術周遊券之旅

—または私は如何にして二千元札一枚で世界の王を超えようと思うに至ったか
…… 柳 本 博 …… 1

Language, Thought, and Culture

—A Brief Insight into Their Relations— …… 川 部 瑠衣子 …… (23)

〈教育実践報告〉

ブロンクス奮闘記 …… 原 田 淳 …… (1)

主体的な〈読み〉を導く指導者の「声」

—太宰治「失敗園」を用いた朗読実践— …… 間 嶋 剛 ・ 小 林 雄 佑 …… 21

2013

獨協中学校・高等学校

式千某年藝術周遊券之旅

——または私は如何にして二千円札一枚で世界の王を超えようと思つたか

国語科 柳本 博

【芸術】

優れた芸術は、優れていなければならないほど、それを読み解く側に快い解釈を求める。解釈し鑑賞することは時々刻々の自らの感性の発達あるいは消長を如実に表す鏡ともなる。古典と呼ばれ、現代に残っている作品は当然、時代の風化にも負けずに維持してきた強韌さ・耐性を価値として有しているといえよう。

〈アートは、人の視覚に関する記憶の膨大な集積回路のなかから生みだされ、見る人の感性や記憶のデータバンクに共鳴したり、刺激をあたえたりするものである。歴史や神話は、それが語り継がれ、記されることで、忘却の海のなかから淘汰されてきた「選ばれた情報」といえるだろう〉

文学や音楽、美術そしてそれらの総合体としての演劇や映画には魅了されてきた。ただ自分が長年味わってきたもののなかで「美術」という観点については抜けているのではないか。以前から美術についても勉強したいとおぼろげに考えてはいた。

いまや自分は次のような言葉に鼓舞されている。

〈用心深く、いや臆病に今までの使い古されたパターンをなぞつてなになるか〉。これは、東日本大震災直後の2011年3月、東京国立近代美術館の「生誕100年岡本太郎展」で出会った言葉である。雷に打たれたように畏れを感じる。

【全集】

「ある作家について理解したいのなら、書簡や日記までも集めた『全集』を通読すべきである」。

大学の講義中の教授の雑談だったか、何か講義の解説だったか、特に印象に残っている言葉の一つである。「全集、完全版、コンプリート」といった言葉とそれを求めていこうとする営為は、何か物事を極めようとするときの自分の指針にもなっている。これまでもさまざま分野を、あるいは作家を、全体像を知ることによって理解しようと努めてきた。ただ、文学、演劇、映画というものに流れすぎていたきらいがあり、また新たな展開や充電をするために、何かの方策を模索してきたのも確かだ。2005年の愛知万博には若く未熟だったころの情熱が再燃

させられた。もちろん自分の未熟さを再認識したこともある。未知の分野は多岐・広範にわたっている。

【周遊券】

中学一年の担任であった当時、学年企画として「博物館見学」があった。定期試験翌日、都内の何か所かをグループで出かけレポートするという学年企画の定番のひとつである。二学期中間後、引率の分担当なされ、東池袋の古代オリエント博物館に出かけた。五月雨式にやってくる生徒グループの人数をチェックし、自分も展示を見て学校に戻る。あとはレポートをチェックするだけである。さほどの関心を示さない生徒同様、僕にとつてもあまり食指の動く展示ではなかった。惰性という言葉で片づく何歩かが終わった。そのときである。劇場や博物館には次回予告などのチラシが多い。そんな出入口に飾られた束のなか、「ぐるっとパス」のチラシを見つけた。都内56か所の美術館・博物館の入場引換券もしくは割引券がついて2000円という企画券の案内であった。期限は最初の使用日から2か月間。以前にもポスターが掲出されているのを見たことはあった。行ったことのある美術館などは片手程度であったか。大半は未見。少々、心が動いた。休日などを使って、はたして行けるものか。2か月といえば休日(日祝祭日)がほしい10日。1日に5館ほど回る計算になる。それに都内の中心という学校のロケーションを考えれば、加えて、放課後の時間や冬休み前の期間、年末までを考えると不可能な数字ではない。試験後の時期、何かが騒いだ。そのときちょうど10月中旬。個人的にいちばん時間があるときだった。春夏秋冬、演劇部の大会関係が

目白押しである。春の新生歓迎会から夏のフェスティバル、秋の初めの地区大会と文化祭に向けての準備(執筆から稽古、リハーサル、本番)、冬は世田谷パブリックシアターのTOKYOドラマフェスタ、春は俳優座劇場と、21世紀以降ずっと追われてきた。ただし、秋の終わりの都大会の仕事がないとそこに少しだけ余裕ができる。そんな間隙を縫えば、十分達成可能な数字であると思つたのだ。自信はない。ただ無論、簡単に達成できる数字であつては挑戦する意味はない。

加えて数字にそそられた。なんといつても「56」館という数字である。56の前は55。この数字はゴジラ松井秀喜の背番号であり、その由来は王貞治のシーズン最多本塁打記録からきている。1964年、王選手は55本塁打を放つた。それ以降、たくさん選手が挑戦して及ばなかった。ランディ・バース(阪神)は一本及ばなかった。タフィ・ローズ(近鉄)とアレックス・カブレラ(西武)が並んだだけである。まだホームラン記録の代名詞として50年近くたつても燦然と輝いている。2か月で完全踏破すれば世界の王を超える。もちろん野球とアートは無関係。数字の符合以外なんの脈絡もない。しかし、これはまさに冒険というにふさわしい挑戦である。もともとなんの変哲もない題材を戯曲にするために四苦八苦、七転八倒してきた。そしてその苦しみは後に楽しみや喜びに転化することも多かった。なんの脈絡があるものか。牽強附会の旅立ちである。

【旅立ち】

演劇もコンサートもライブが何よりである。そして美術の場合は美術館に足を運んで実際に見なくては話にならない。ごくたまにしか美

術館に行ったことはなかった。体系的なものも考えると、ほとんど「知識ゼロ」である。というわけで、「ぐるっとパス2007」で体験した記録をまとめてみた。2007(平成19)年10月下旬から2か月間の記録である。「ぐるっとパス」は公益財団法人・東京都歴史文化財団が発行するもので、エリアごとのスタンプラリーもある。年によって少しずつ変わるものの、10館ほどのスタンプを集める年もあるし、いくつかのエリアで各一か所を見て応募資格とした年もある。

【対象施設一覧】下に書いてある展覧会に無料入場。()付きは割引

●上野エリア

- 01 国立科学博物館……………常設展・(企画展)
- 02 東京国立博物館……………(常設展・企画展)
- 03 東京藝術大学大学美術館…芸大コレクション展・(企画展)
- 04 東京都美術館……………(企画展)
- 05 旧東京音楽学校演奏堂……………常設展・企画展
- 06 恩賜上野動物園……………入園
- 07 上野の森美術館……………(企画展)
- 08 下町風俗資料館……………常設展・企画展
- 09 書道博物館……………常設展・企画展
- 10 朝倉彫塑館……………常設展・企画展
- 11 一葉記念館……………常設展・(企画展)
- 皇居周辺エリア
- 12 東京国立近代美術館……………常設展・(企画展)
- 13 東京国立近代美術館 工芸館……………常設展・(企画展)

- 14 東京国立近代美術館フィルムセンター……………常設展・企画展
- 15 科学技術館……………常設展・企画展
- 16 山種美術館……………企画展
- 17 ブリヂストン美術館……………常設展・企画展
- 18 相田みつを美術館……………常設展・企画展
- 19 出光美術館……………企画展

●目黒・港エリア

- 20 東京都庭園美術館……………庭園・企画展
- 21 国立科学博物館附属自然教育園……………常設展・企画展
- 22 松岡美術館……………常設展・企画展
- 23 目黒区美術館……………企画展
- 24 東京都写真美術館……………指定の企画展のみ
- 25 森美術館……………(企画展)
- 東京シテイビュー……………(入場割引)
- 26 サントリー美術館……………(企画展)
- 27 泉屋博古館分館……………企画展
- 28 大倉集古館……………常設展・企画展
- 世田谷・新宿・池袋エリア
- 29 世田谷美術館……………収蔵品展・(企画展)
- 30 五島美術館……………(企画展)
- 31 世田谷文学館……………常設展・(企画展)
- 32 損保ジャパン 東郷青児美術館……………(企画展)
- 33 東京オペラシティアートギャラリー……………企画展
- 34 NTTインターコミュニケーション・センター「ICC」……………企画展

- 35 古賀政男音楽博物館……………常設展・企画展
 36 秩父宮記念スポーツ博物館……………常設展・企画展
 37 新宿歴史博物館……………常設展・企画展
 38 古代オリエント博物館……………常設展・企画展
 ●両国・深川エリア
 39 東京都江戸東京博物館……………常設展・(企画展)
 40 江東区芭蕉記念館……………常設展・企画展
 41 東京都現代美術館……………MOTコレクション・(企画展)
 42 江東区深川江戸資料館……………常設展・企画展
 43 江東区中川船番所資料館……………常設展・企画展
 ●臨海エリア
 44 船の科学館……………常設展
 45 日本科学未来館……………常設展・(企画展)
 46 パナソニックセンター東京リスピーア……………常設展
 47 葛西臨海水族園……………入園
 ●多摩エリア
 48 武蔵野市立吉祥寺美術館……………常設展・企画展
 49 井の頭自然文化園……………入園
 50 三鷹市美術ギャラリー……………企画展
 51 江戸東京たてもの園……………常設展・企画展
 52 多摩六都科学館……………常設展・企画展
 53 府中市美術館……………常設展・(企画展)
 54 府中市郷土の森博物館……………常設展・プラネタリウム・(企画展)
 55 多摩動物公園……………入園

56 八王子市夢美術館……………常設展・企画展

以上の56館。この便宜的な通し番号はそのまま標題代わりに付記し、「ぐるっとパス」以外で入った場所は○で示した。「常」は常設展のことであり、企画展・特別展はタイトルを記した。

【10月某日】銀座く六本木 4館(25は併せてカウント)

19 出光美術館「仙厓 禅画に遊ぶ」

窓口で2000円札を一枚出して購入する。すぐさま左肩が固定されたチケットの束を受け取る。裏表紙に日付のハンコが押され、該当箇所が点線どおり切り取られる。「ぐるっとパス」の米えある第1館目。ハンコを押されて2か月間の旅の開始。自動改札になって久しいところ、駅の改札で切符にハサミを入れられる気分似ているか。初っ端から感慨。こんなことでもなければ、絶対に「禅画」などにお金を払って観ようとしなかったはずだ。ところが、意外なまでに発見がある。いわば江戸時代の漫画である。たとえば蛙の絵がある。〈坐禅して／人が仏になるならば〉と言葉が足されている。これはつまり、「蛙ならばどうなのか」ということだ。蛙はいつも坐禅しているような姿なのだから。ふむふむと1館目から唸ったのだ。それから〈気に入らぬ／風もあるうに柳哉(かな)も風刺的で風流。有名な△□▽がただ墨で書かれただけの絵(字?)もあった。2013年初春にBunkamuraで「白隠展」を見た。ふと筆で書かれた描線に感じ入る。仙厓に至る系譜に思いをはせる。

18 相田みつを美術館「いまから ここから」

東京国際フォーラムの中にあり、アクセスのよい美術館。著名な詩画と出会う。独特の筆跡によるものが大きいのであろう。〈雨の日には／雨の中を／風の日には／風の中を〉〈夢はでつかく／根はふかく〉〈一生勉強／一生青春〉……これらの言葉が身体に染み入ってくる。中でも最も長く立ち止まりメモしたのは次の詩。〈父母で2人／そのまた父母で4人／そのまた父母で8人／10代前になると1204人／20代前になると1万人を超える〉。その悠久の流れが心地よく、そして驚きを誘う。なお、ここには翌年2月にも再訪した。「花の詩画と書の世界 星野富弘・相田みつを展」。星野氏の近影を見る。白髪が増えている。もう還暦を超えているのだから当たり前か。初めて氏の存在を知って衝撃を受けてから、20年近く経つ。あいかわらずその境遇からもたらされる優しさが染みる。相田みつをとのコラボレーションはまるでフォークデュオのようだ。〈この手がもう一度だけ動くのならば母の肩をたたきたい〉〈トンボよ、止まっていていいよ〉そこは足の指だけでも動かないから〉〈苦しみと悲しみの両方あって私が私に(自分が自分に)なる〉などという言葉もある。じわりと胸に重いものが沸き起こる。もちろんその重みは決して不快なものではない。

25 美術館「六本木クロッシング2007..未来への脈動」展

やはりお金のかかっている美術館だけある。この日、こだけ有料。券をもつてしても100円割り引かれるだけで1400円。ただし最も素晴らしかった。簡単に言うると若い作家を中心とした、コンテン

ポラリーというにはあまりにも斬新なコンセプト。絵画だけでなく、多岐にわたっている。中でも最も秀逸だったのが「できやよい」の絵「カッペリ」。鮮やかな水色をパックにパステル風の色彩の花がまるで人物のように、色を指で広げているからそう見えるのか、特に華やかで鮮やか。一瞬で目が離せなくなり、いつまでも見つめていたくなる。それから榎忠のメタリックな街の出現かと思いきや、すべて廢部品による展示もある。続いて吉村芳生「ドローイング新聞・毎日」。これは、印刷された新聞をすべて自らの鉛筆で模写するという、気の遠くなるような試みである。写真もすべて鉛筆で写すのだ。何か意味があるのか。しかし意味を問い始めたなら芸術の存在意義という根本的な問題に行き着くだろう。横山裕一の「トラベル」。機械的で、極力特徴を排した線は漫画の範疇は超えないだろう。四谷シモンの少女人形。唐十郎の赤テントで有名だった。小道具もそういえばアートといえよう。他にも「台風芸術」なる展示もあった。台風接近を模してアートにするのだ。台風が来るぞ。そう言われると警戒すると同時に、子供の頃から言いようのないパワーや圧倒的な魅力を感じていた。そのワクワク感を描くのだ。大型扇風機に飛び上がり舞い踊る各国のお金。パックには六本木の実際の街並み。六本木ヒルズ森タワーの53階というロケーションを生かしてこそこの試みである。そしてここでは第一目目にして教えるの作品と出会ってしまった。長谷川踏太君とアート集団「TOMATO」の作品である。ぜんぶアナログの時計が7つほど円形の中に配置されている。時間が動く。たとえば6時29分から30分。すると長針と短針がぴったり合う。これはいわばシンクロされたダンスである。幼い中学生だったころの純粹さを思い起こし舌を巻くばか

りであった。あとは、写真で示されるのだが左手の親指と人差し指の間、柔らかい部分に罫線を引いて、最も効率的な覚え書きとする、いわばコロンブスの卵のような作品まであった。この初日、5館ほど見たのだが、何より森美術館のインパクトは大きかった。美術も映画や演劇に負けてはいないことを実感する契機となった。以後、当館の主だった展覧会には出かけている。さまざま個人展もそうだが、「アートは心のためにある」などの企画展がまた素晴らしいセンスなのだ。今年(2013年)、会田誠の個展の開催もあり、ついに年間パスポートを購入するまでに至ってしまった。

25 東京シティビュー

同じフロアに展望台もついている。六本木のヒルズからの眺めは高い。東京タワーも近い。加えて、これも追加料金を払うことになるのだがそのまた上の屋上にも上がることができる。ヘリポートを囲むかたちでウッドデッキ(木造)になっている部分を天気がいいときだけ歩ける。オープンエア、海拔280メートルの景色というのはまさに壮観。ただし、風が吹くとすぐ閉鎖になる。当たり前だ。ここからの東京のパノラマには心奪われた。近年は東京スカイツリーと東京タワーがコラボするように一望できる。東京タワーは至近距離にあるためその迫力では634メートルに決してひけをとっていない。スカイツリーの方角には高いビルがあり下半身が覆われていることも影響しているのか。

17 ブリヂストン美術館「セザンヌ4つの魅力」

さすがに1日にこれだけ見るとすでに満腹である。さすがは音に聞こえるブリヂストン美術館に対し、そのコレクションの凄さは感じているものもう別腹にも入らない。それでもここは自分が都立高校の時代に美術の課題で訪ねたことなどを思い出しながら早足で駆け抜ける。ルノワールの「少女」。ふくやかな少女の姿に美を感じ、思いをよせたからか、しばらくここで購入した絵葉書のことを思い起こす。他にもピカソ「女の横顔」、セザンヌ「サント・ヴィクトワール山とシャトー・ノワール」などが印象に残った。ただし、〈印象派〉について明確に意識するのはもう少し後のことである。

【10月某日】深川〜東大島〜清澄白河(4館。計8館)

40 江東区芭蕉記念館

俳句・俳文ならば面白いのではないかと思った。ところが、やる気のない館。単に紙のコピー、印刷、模造品ばかり。もともとここは入場料が100円なのだ。最悪の評価だと思ったが外に出ると芭蕉像と展望スペースがあり隅田川の光景が広がる。展望台と銘打つほどに高さはないものの、文字どおりの光景、光が広がる川面を見て少しだけ評価を上げて外へ出る。

42 江東区中川船番所資料館「江東区のとからもの」

都営線の東大島駅に降りたのは初めて。日曜の午後、草野球に興じる歓声。川面を走る秋風。建物は立派。中には原寸大に再現した船番所の模型がある。近づくとセンサーがあり、お奉行様が説明を始める。

「のぼってはならぬぞ」など注意も含まれているところは少々ユーモラスな感じで、興味がほんの少しだけ鎌首をもたげる。ここには絶え間なく水音がしていた。川の流れが船の舳先に当たる小さな音である。繊細な水音が落ち着きを生み出している。

42 江東区深川江戸資料館「堀割が町をつくる」

ここもまたどうせやる気のない展示だろうと思っていた。入場直後すぐのパネル展示。江東区ゆかりの人物、たとえば、伊東甲子太郎。新選組の中でもこの程度か、と進む。順路をたどると地階。目を見張る。江戸の町並みが再現されていた。江戸東京博物館ほどの大きさはないものの、魚屋や長屋の風景が実によく再現されていた。全体的に、いかにもの雰囲気がある。匂いが立ち昇ってくるようであった。舞台セットでよく言われるところの「汚し」がまた見事。ただし、ライトなど、文字幕や東西幕などで隠せばよかったのだが。

41 東京都現代美術館「SPACE FOR YOUR FUTURE」

清澄白河名物のこの館来訪は3回目。現代美術館ならではの最先端美術、その秘訣はクロスオーバーだと思った。最も感動したのが「自転車で街を疾走する」ビデオ映像。疾走そのものの目線で撮り続けているのだ。実際に街を、止まることなく15分。「大脱走」ふうジャンプのスピード感もある。足元に映像が据えられているので楽しい錯覚もある。それから、沢尻エリカの100変化写真もある。メイクで化けるのだ。当時、「別に」で話題。看護婦や悪魔、アルカイダふうテロリスト、あしゅら男爵のように顔の半分が猫、など。なお、このコー

ナーには豪華なパンフレットが無料で配布されていた。また、同時に展示に参加していたのは蜷川実花。造花と金魚。ブレヤピンボケを最大限に生かしている。のち、蜷川と沢尻は映画『ヘルタースケルター』で監督と主演としてコンビを組むことになる。それからマイケル・リンの「花柄模様」。三方の壁に鉛筆で繊細に。奥の一面のみ鮮やか彩色。ドキツとする。鉛筆が本当に美術館の壁に書かれているように思えるのだ。同じく、「ポップ道1960S—2000S」では、特別公開の岡本太郎「明日の神話」を再び仰ぎ見る。実は先立つこの8月にジブリの美術・男鹿和雄展があり、すでに見ていた。没後、幻の大壁画が発見されたというふれこみのもと、テレビなどでも大々的に報道されていたのだ。2回目ではあったがやはり、その巨大さの凄味と色と形の「ただものではない」感に圧倒される。美術が身近になった証拠か、いまは京王線渋谷駅への連絡通路に飾られている。岡本太郎の言葉のひとつ引用しておこう。「うまくあつてはならない。きれいであつてはならない。こちよくあつてはならない」。アンディー・ウォールホルの著名なモノロー色違いや奈良美智の性悪説のような子供の顔。顔と言えば、人形に人間の顔、というのもあった。鞆の中に投影された立体の顔が呻いている映像。普通の人形ながら顔がリアルなので気持ちが悪い。その他、このあと魅了される会田誠「美しい旗」(戦争画RETRUNS)シリーズの1枚)と出会う。チマチゴゴリに大極旗と夏服セーラー服に日の丸の対峙。劇画のような描線と、スラツと背筋の伸びた美しさ。いつまでも見つめていたいと思わせる崇高さ。深い精神性というものを感ずる。それから、なりきり美術家・森村泰昌に出会う。「批評とその愛人」。リンゴに自らの顔が映し出され

ている。

【11月某日】上野 5館（計13）

08 下町風俗資料館

江戸期から今度は大正〜昭和ヒトケタへのノスタルジー。もちろんリアルタイムで知っているわけではないが、なんとなく懐かしい。上野にも大仏があつたそう。啄木の歌にも出てくる稜雲閣は、関東大震災で上階が壊れ、倒壊防止のために意図的に破壊されたそう。

04 東京都美術館「フィラデルフィア美術館展」

音声ガイドがあるところは利用しない手はない。この館も種れいによる500円。森美術館は無料であつたが、これも素晴らしい美声で文句なし。耳かけ式も優しい。いろんな情報というより、絵に関する周縁事実が興味深い。ガイドを聞くと、絵がエンターテインメントとして完全に立ち上がってくるように思うのだ。フィラデルフィア美術館とは、前の階段をロッキーが映画の中で駆け上がった場所。この展覧会の白眉はドロテア・タニング「誕生日」。こちらをキッと睨みつける女性。右手にはたくさんの扉が描かれている。なにが誕生日なのか。そう、ここからいろいろなドアをくぐっていく端緒としての誕生日だというメタファー。スカートにまつわりついている茨には、まるで彼女の将来を象徴しているかのよう。加えて、白い女もまわりついている。幻想的ですからあり、現実を象徴しているともいえる。続いてダニエル・ガーバー「室内、朝の光」。巨大な窓、左側に手紙を読む少女。テーマは光、ひたすら光。彼女の衣服を通して透き通る光さ

えも描かれている。コロ「テルニの山羊飼」。画面中央に大きくV字に開いた真ん中の光が際立つ。山羊や人間はあくまでその光の守護者でしかない。ホアキン・ソローニャ「幼い両生類たち」。海辺で戯れる二人の男の子。後ろを向いておしゃまな感じを与える日傘の姉（？）。微笑ましい光景。男の子の裸の尻の丸みが丸くてよい。ジョージア・オキーフ「ピンクの地の上の2本のカラーツリー」。花のクロージアアップ。エロティックではないと作者が強弁すればするほどその意味は強まるだろう。ルノワール、ゴッホも他に登場。満足の展覧会。近い将来、現地にぜひ出かけてみたい美術館である。

05 旧東京音楽学校奏楽堂

上野の森の中でも、こんな企画でもないかぎり絶対に足を踏み入れることはなかったであろう場所。展示にはまったくもって感心しない。クラシック音楽史にもまったく興味は立ち上がらなかった。明治23年建造というホールに足を踏み入れる。ミシミシと音がする。ピアノの音が聞こえる。練習も兼ねているのだろうか、学生というには少々とうのたつた女性が練習中。座席に腰掛け、しばし音を聴く。感想に変更点はない。

03 東京藝術大学美術館「岡倉天心——藝術教育の歩み」

岡倉天心。藝大の創設に関わった人物のひとりだという。しかも自分の書いたものではない、コレクションだということである。煙草を喫っている姿の絵がある。眼光鋭い。猿回しや不動の迫力の眼差しがある。

常&「中村不折コレクション——肉筆の美 隋・唐代」

漱石とも交流があった中村不折の旧家が博物館となった。千年以上前の独特の字体を見る。それだけ。この日5館目、さすがに疲れてしばし館内ベンチに座る。

【11月某日】西新宿く六本木 6館+1(計19)

34 NTTインターコミュニケーション・センター「ICC」

「LIFE fluid, invisible, inaudible……」

新国立劇場目的以外で初めて訪れた東京オペラシティ。閑散。意外な空間が展開されていた。周りに人がいないのに、入口では「混みますよ。コインロッカーをご利用ください」。確かに中に人はいた。一種の宗教的体験。坂本龍一と高谷史郎。音楽と、水槽に移された映像。暗い空間に12メートル四方、30センチ高の水槽が3×3。水槽内部に人工的な霧。透過と不透過をつなぐ流動的パターン。水と霧の織りなすパターンを通過することで絶えず融解される。抽象と具象のあいだを、可視と不可視の境界を、聴きとれるものと聴きとれないものあいだを、わいをたゆたい続けるのだ。映像の中身はたとえば、人型のシルエツト、動かない。数字の羅列。一面を覆いつくす。水、雲。戦争、判然。意志を投げる民衆。宇宙の果て、アルファベットの羅列。めまいを覚える。40〜50分はいただろうか。履き古した靴を枕に横たわって見ていた。たとえば坂本龍一であろうと絶対パスしていただであろうに、思わぬ拾いものと感じた。

33 東京オペラシティアートギャラリー

「北欧モダン デザイン&クラフト」

前者と同じ建物ながら感想は真逆。奇怪な椅子をどうしろというのだ。観て楽しむからアートなのか。北欧漫画界の巨匠だからか、「ムーミン」のトーベ・ヤンソンもイラストで登場してきた。

32 損保ジャパン 東郷青児美術館「ベルト・モリゾ」&常

ベルト・モリゾのキヤッチフレーズは「最も美しき印象派画家」。女性ならではの家族、特に愛する娘を描いた作品が多かった。「寓話」乳母(お手伝い)と小さな娘が向かい合っている。絵本を読み聞かせるのであろうか、色彩とともにすべてが愛らしい。「夢見るジュリー」モデルである上記の娘の成長した姿。もともとの美貌に加え、頬杖ついた姿が凛々しくも美しい。「モルクルのリラの木」母と娘二人の遠景。優しい眼差しを感じる。あまりリアルではない夢幻の感じ。そして、常設展のほうでゴッホ「ひまわり」を見る。購入価格56億円はともかく、やはりただならぬ迫力を味わう。立ち上がってくる油絵の具の筆跡、ゴッホ独特のタッチを初めて認識。魅了される。

27 泉屋博古館分館

六本木一丁目は香港テイスト、坂をひたすらエスカレーターで上がると建物。中はたしかにきれいなのだが、それ以上の感興を覚えることはない日本画。「群貝」という、波に打ち寄せられた貝、複数の姿を描いた作品だけに唯一感心。精密であった。

28 大倉集古館「富岡鉄斎展」

富岡鉄斎の「萬歳」という書。上には日の丸の赤(大正4年の作)や常設の大きな仏像などを見る。雰囲気は静かすぎてあまり好みではない。

26 サントリー美術館「鳥獣戯画がやってきた！」

東京ミッドタウンに移動。オペラシティとは違ってまだまだ新しく、人も目立つ。展示品は漫画のような扱いなのだろうが放屁など下品な描写も目立っていた。

○国立新美術館「フェルメール——牛乳を注ぐ女とオランダ風俗画展」

これはパスには入っていない。ただし、名作「牛乳を注ぐ女」は必見の名作ということで。黄色、エプロンの青、赤。なかでも特に独特の青(フェルメールブルー)に魅せられる。光だけでなく、パンの質感。精緻さはひとつの写真のように思われた。絵は有名なほどにはそんなに大きくはないのだ。見学場所は絵を正面に、最前列は常に動いてゆっくりお進みください、というエリア。立ち止まってゆっくり鑑賞できるほうは少し距離がある。いまだかつて一枚の絵でこれほどまでに二度見したことはあっただろうか、と思うほど。何度も最前列を往復する。五度見までは数えた。まさに名作といわれるだけのことはある。他のオランダ風俗画にはあまり感心せず。それだけフェルメールが光っていた。唯一、ニコラース・ファン・デル・ヴァーイ「アムステルダム孤児院の少女」が横向き、窓の光のなか、一心不乱に本を読む光景は実に美しい。

【11月某日】新宿く両国 2館(計21)

37 新宿歴史博物館 常&「夏目漱石と新宿の文学者たち」

塩原姓の話、芥川の柳川姓とともに家庭に恵まれていなかった文学者のことを思う。他には、都電やムーランルージュなど昔の新宿の繁華街ぶりを知る。

39 東京都江戸東京博物館

「文豪・夏目漱石——そのころとまなざし」

こちらも漱石。入場するといきなり人形。声、音声による復元。穏やかな印象。前述の歴史博物館と同じものもいくつか。印象的なのはデスマスク。「こころ」の冒頭部分。養父と五歳時の写真もあり。

【11月某日】府中く八王子 4館(計25)

51 江戸東京たてもの園 常&「玉川上水と分水」

建築物がアートとなる。こういう展示物は愛知の明治村以来か。1929年の建物を移築した銭湯など、変わった印象を持つ。見たこともないものに対するノスタルジーといえるか。玉川上水展にも引かれていたのだが、ここで心中した作家のことなどは全く出ていない。江戸時代に「木樋」があったという事実には驚いた。

53 府中市美術館「キスリング展」&常

描線が濃い。漫画的な線ともいえる。「モンパルナスの華」という副題。こちらをキッと見つめる像が迫る。なかでは「女優エディット・メラの肖像」がピカイチ。扇情的で美しい。また、常設展の清宮督文

「夏の終わり」。筋雲と海を前に向かう少女の後ろ姿は一幅の詩といえよう。

55 多摩動物公園

「ぐるっとパス」には「美術館・博物館など」とある。その「など」はここ。動物園までついているのだ。ライオンバスにライオンを引き寄せるため、餌となるベーコンは常に窓枠のところについている。コアラは木につかまって寝ている。器用なことをするものである。

56 八王子市夢美術館「ポップアート 1960S→2000S」

先の東京都現代美術館に比べると残念ながら規模も作品の力も乏しい。同じキース・ヘリングにアンディ・ウォーホル、リキテンス・タインなどもある。ところがコレ、というものが無い。ヘリングの二人の頭が重なってハート型になっているとか、シャレしているのだが。

【11月某日】国立競技場〜上野 3館十一（計28）

36 秩父宮記念スポーツ博物館

〈オリンピック大会で重要なことは、勝つことではなく、参加することである。人生において重要なことは、成功することではなく努力することである。根本的なことは、征服したかどうかにあるのではなく、よく闘ったどうかにある。このような教えを広めることによって、いっそう強固な、いっそう激しい、しかもより慎重にして寛大な人間性をつくりあげることができる〉（オリンピックの父と呼ばれるピエール・ド・クーベルタン男爵Ⅱの言葉）。最初の一文だけ

でなく、あとに続く言葉をしっかりと知る。意味の広汎性を感じる。他にも五輪の旗が順に青黄黒緑赤の順だという。展示により同じ金メダルも形さまざまであることを知る。なお、当日はマラソンのため国立競技場の中には入れなかった。翌年3月、入ってみた。風の中、遠くから漏れ聞こえてくる優しくも軽快な音楽。高いところから遠く近く都内の建物を見る。桜が近い、春の匂いが充満していて快適な競技場見学だった。

07 上野の森美術館「シャガール展」

〈20世紀最大の画家のひとり、色彩のファンタジー〉と銘打たれているが、それほどでは。その最大の原因は小さいところにあった。ここまでいろんな絵を見てきたが、マルク・シャガールは小さなリトグラフであり、満足には遠い。大画面に慣らされたTV視聴が、旅先で小さくなってしまったような感じである。もちろん中身が肝心である。でも、ブルーの色彩、女の子たちの群舞「パレード」と、ほとんど青の全身像がバックに溶け込み、加えて赤と緑ありの「アルルカン」だけがよかったか。音声ガイドがないのも残念。

○国立西洋美術館「ムンク展」

直前のシャガールと比較してより興味深い。しかしそれにしても不吉。その理由を認識した。ムンクと言えばドクローなのだ。白目と黒目ではなく、すべて黒というよりスコンと抜けてしまっている。〈生命のフリーズ〉というシリーズがある。うねったような描線と川の橋の上という作品群。個々独立でなく全体として一つの作品だという考え

方。有名な「叫び」も連作であったという点は驚き。「叫び」「不安」「絶望」と並んでいる。ここで「叫び」はコピーのポスター大だけであった。本物でないのはやはり残念。

02 東京国立博物館「大徳川展」

入場口近くにいきなり「金扇馬印」が展示されている。3メートル近くある黄金の扇が飾られている。徳川幕府の威容を実感する。300年前の宝物。漆、黄金、めでたい色ばかりだ。展示終了日が近く大混雑であった。

【11月某日】青山〜新宿〜上野 6館(計34)

○岡本太郎記念館

もともと個人のアトリエ。狭く雑然。それこそ岡本太郎。「座ることを拒否する椅子」などもある。とにかくパワーが溢れている。太陽の塔などのミニチュアもあり、久しぶりに本物を見たくなった。大阪への思いを抱く。

35 古賀政男音楽博物館

古賀邸への道の石畳を再現したというイミテーションあり。横には小さな映像。桜の揺れるさまや蝉の鳴き声。幾多の歌手や作曲家が通ったのであろう。他にもカーペットの上に足を置くと曲(歌付き)が流れるという趣向は近未来において応用可能になるか。

11 一葉記念館

ここはまだ新築の建築物が白眉。1階エントランスから3階まですべて斜めに階段が通り、上がっていくにつれて説明が深まるという仕組み。人形で作品を示している。地下には化粧室や講演会場にもなる小ホールがある。樋口一葉。本名なつ。24歳の若さで夭折。いま五千円札。医者嫌いで病院に行くのは拒否していたという。なお、命日23日を前に3日間の無料公開日にあたっていて人が多かった。

10 朝倉彫塑館

スリッパに履き替えてトントントンと階段上へ。再開発中の日暮里を見る屋上見学が快かった。一階にある裸の13、4歳の少年。百年近く前だが、目玉が入っているため黒いブロンズ像ながらリアル。

06 恩賜上野動物園

中学国語の教材に「変わる動物園」という説明文がある。檻、柵という従来に捉われれない、共生施設としての動物園。そういった概念を明確に理解できた。生態系に合わせて、共生している動物たち。そんななか、ゴリラがバナナを取りに行く。すると乗った台が体重計でその場で体重を測って見物人に知らせるなどの工夫も見られた。演出に関して。入口入ってすぐにパンダというのはクライマックスがすぐ来てしまうドラマのようでよろしくないのでは。もちろんロケーションとしては人が集まりやすい人気の場所なのだろうけど、願わくば奥で会いたい。また、行列が曲がりくねって列の途中でも姿が垣間見えるという良さもあるのか。

01 国立科学博物館「大口ロボット博」

ロボットをからくり人形に見立て、歴史的に考察していく。発想の冴え。三菱のWAKAMARUやTOYOTAの車型や演奏型のロボット。愛知万博を思い起こす。TOYOTAのロボットとは実は初対面。他にはASIMOのショウが印象的(提供はHONDA)。ASIMOが普通にいる未来の家庭という設定。息子にとつてはサッカークICKの相手。蹴る動きのできるASIMO。娘と一緒にダンスの試行錯誤する。ASIMOは踊れもするのだ。母の替わりに友達に飲み物を出す。しかも名前を聞いただけで好みの飲み物を識別・記憶している。父の鍵を下の駐車場まで届ける。歩けるのだ。走るまでいかないけれど早歩きはできる。しかもちよつと失敗しかけて別方向に行きそうになるという演出も施されていた。

14 東京国立近代美術館フィルムセンター

カメラなどの資料が展示されている。あまり機材には興味が無い。それにしても映画フィルムもデジタル化の波が押し寄せているそうである。他にも毎日映画コンクールにその名が冠されている大藤信郎が日本のアニメ黎明期の人であることを知る。

【11月某日】竹橋 3館(計37)

15 科学技術館

ひたすら「理科」「科学」「技術」。ここにも愛知万博の影あり。立のバビリオンのなユビキタスシステムがすでに導入。入口の案内ロボットとの対話やタッチパネル式で最先端技術と対面。たとえば未来

の通信システム。すべてがインターネットで誰といつでもどこでも何とでも、という点が目新しい。他にも壁一面のTV画面が楽器になったりボール遊びしたり、など。

13 東京国立近代美術館 工芸館「工芸館30年のあゆみ」

工芸品に興味は乏しい。芸術の王道のひとつとは思うけれど自分には遠い。いわば名作選・ベストアルバムの展示であろう。ところが食指が動かない。唯一、四谷シモンの少女人形はここでも異彩を放っていた。

16 山種美術館「秋の彩り——小林古径他」

日本画・水墨画・風景画にもあまり興味を持ってない自分を自覚してきた。魅かれるのは洋画・人物画・美人画だ。唯一、東山魁夷には感心する。遠くから見ても、この人の作品だというオリジナリティーを感じる。似ている作品はフォロワーにすぎない。古典として遺っているものはすべてそうだとはいえるか。ここでは3月に「春のめざめ——大観他」を見る。横山大観は、その名のとおり「大きく観る」ことのできる巨大さがよい。しかし他は早歩きで一瞥。日本画には合わない。

【11月某日】世田谷く横浜 3館+1(計40)

29 世田谷美術館「パラオ——ふたつの人生 鬼才・中島敦と日本のゴージャン・土方久功展」

世田谷パブリックシアターだけでなく、さすがは世田谷。展示の仕

方も凝っている。洒落ている。普通の紙による展示ももちろんあるけれども、観覧者の接近を察知してプロジェクターで壁にも投影される。壁一杯でとても読みやすい。ここで感心したのは中島敦が息子・桓つとむらに寄せた南洋からの絵ハガキ。愛情に溢れ、端正な肉筆であった。この人は原稿も端正であった。南洋への出張は一年足らず。それでも夭逝した中島の人生に大きな影響を与えたのだろう。おおらかさ、巧まざるユーモアなどを思い出す。土方の絵もうまくマッチしている。ゴーギャンというより漫画のようではあったが。他にも「夢からの贈り物——ルオー、ルドン、長谷川潔、駒井哲郎」展示もあり。同じアングル、同じモチーフの繰り返しがあり、少々疲れた。

30 五島美術館

まったく面白くない釜展。幾何学模様の釜といわれても閉口。運慶作と言われているが定かでない明王像は大迫力。庭園は山道と見まがうほどの規模。仏像・地蔵がそこかしこに。見晴台はそれほど見晴らしとは思えない。唐突に二子玉川への東急線が近くを横切り、山道でないことを実感させてもらえる。

31 世田谷文学館

常&「植草甚一／マイ・フェイヴァリット・シングス」

入館するや90年代初頭から敬愛する絹谷幸二の絵画がありテンションが上がる。意外な出会は熱を上げる。世田谷ゆかりの文学者についての展示。沢木耕太郎「散歩」にまつわるエッセイの原稿用紙。その端正な文字。逆に以前居住していたという寺山修司の文字は丸く

て味がある。横溝正史の角川文庫版の旧版表紙羅列。小さくも、おどろおどろしい表紙絵画群も展示に値するといえよう。他にはカフェにゴジラの着ぐるみも展示してある。撮影所が近いからか。植草甚一は2008年に生誕百年ということで特集展示。散歩、古本、ファッシュョン、美術。いかにも小粋なエッセイストの印象。コラーージュ入り書簡の展示もお洒落であった。

○横浜美術館「シュルレアリスムと美術」

いろいろな美術館・博物館を回っていると、次回展とか周辺の間所も訪れたくなる。この日は東京西部ということでそのまま横浜へ行ってしまふ。地下鉄・みなとみらい駅の地下道を上がっていきなり、の感じが良かったのか、美術館の建物自体の威容に打たれる。国立新美術館よりもスケール感がある。富士山が広大な裾野を持つように、何よりそれは前庭の広さに依拠するものか。都内を離れるとこども豊かになるかと感じる。内部の展示自体もゆったりとしていた。配列の間に「間ま」があるのだ。堪能の度合いが深まる気がする。ここはなんといつてもルネ・マグリット「大家族」。飛翔する鳥の影のみが青空に雲、という構図。三谷幸喜の演劇でも舞台装置として使われていた。しかしなぜこのタイトルなのか疑問は残る。空のブルーはとも素敵。他にも同じ作者の「人間の条件」。キャンバスの絵と背景が一致。しかしあくまでも全体は絵であるという。他にサルバトール・ダリ「幻想的風景 英雄的正午」で下半身は実像、上は消えかけた雲の姿に鳥が髭のある人物の顔を描き出す。アンドレ・マッソン「殺害」は奔流された赤色の抽象画と思われるものの実は人の顔のようなものも見

える。ジョルジオ・デ・キリコ「ヘクトールとアンドロマケ」の別れは三角定規などで描かれた二人の人体。ただし足のふくらはぎなどには丸みがある。というわけで、「ぐるつとパス」からは逸脱して遠征したことになる。それでもとても充実していて来た甲斐は大いにあった。自身のシュルレアリスムについては、アントナン・アルトーを含め、もう少し深く広く勉強するべし、と実感する。

【12月某日】目黒く恵比寿 2館(計42)

23 目黒区美術館「目黒の新進作家——七人の作家、7つの表現」

いよいよ12月に入ってしまった。訪れた目黒。区美術館でもかなり充実している。特にいきなり度肝を抜かれたのが瀧健太郎のヴィデオ・インスタレーション(現代美術で、従来の彫刻や絵画のジャンルに入らない作品とその環境を一つの総体として呈示したもの)。題は別であるもののいわゆる「箱の中の女」。箱の中にいくつかのモニター。クリアな映像が実にリアル。箱の中の女が時に手だけ、時に足だけ、顔・背中。それがクリアなビジュアルで蠢く。扇情的で衝撃的。言葉を超えた幾多の感情が泡沫的な意味となつて浮かんでは消える。他にも源生ハルコ「促線緑」^{セキゼンキョク}。美しい線にパステルで緑色。同じく東亭順のアクリル絵具によるパステルカラーは淡色が実に心地よい。屋代敏博「銭湯画」。まるで王宮のようである。古来の富士がこれもパステル調。前のカランなどと相まって実に収まりの良い造形。そう、絵ではなく写真なのだ。他にも別の作家であるが、アジア・アフリカ・エジプトなど、ただの木のドアの写真にはその重み身も感じたし、モノクロの少女のアップの絵に赤い色が蠢く絵もよかった。トータル

で東京都現代美術館のヤング・ミニチュア版と見出す。区美術館、畏るべしである。

24 東京都写真美術館「昭和 写真の1945〜1989

「オイルショックからバブルへ」

これまで江戸・戦前などの写真を見てきたけれど、これは現代の、いまの展示。興味深く既知の場所、建物、服装、顔つき、髪型、イベントなどを観る。写真集で有名な橋口謙二の「17歳」とその後の変化の展示も見た。もう20年近く前のその年ということは、もうアラフォー。立派な大人になつたと実感。王の肖像。浮浪者の顔も何やら刻まれた皺が神々しい。何げない街角の写真。覚えている。あのころの汚い日本。多摩ニュータウンや筑波万博パビリオンの再開発の写真。昭和最後の太陽、昭和64年1月7日の沈みかける太陽。写真の持つ雄弁さを感じる。当館にはのちに森村泰昌の個展に訪れて大変魅了された。

【12月某日】葛西くお台場 5館(計47)

47 葛西臨海水族園

以前、学年企画で引率に来たことがある。出入口が潜水艦を模しているのか、ひとつのドームになっている。実に大げさだといえよう。水族館など時間つぶしの何ものでもないと思いつつ、見ていると気持ちと和んでくる。ペンギンの生態やさまざまな深海魚の色と形には驚かされた。

46 パナソニックセンター東京リスピーア

こんなイベントでもないかぎり、絶対に入ろうとは思わなかったであろう。透明で四角い形をしたカセットのようなものを差し込むと中身が浮き上がる仕組み。ハチの巣の六角形の頑丈さ、素数の話、蟬の生息、13年周期だと2年、5年などの周期の天敵に合わないとか。足で踏んで色をつけてゆくコーナーなど。磁石による実験コーナーもあり、こういう「科学」的なものなかでは、科学技術館よりも面白く観られた。

44 船の科学館

船、海、島国。ありがたい、すばらしい。でも興味は沸かない。造船技術はスケールが大きいと再確認するばかり。本館はそんな印象。ところが、南極観測船・宗谷の内部「狭い」の一言。足を伸ばしては寝られなかったであろう過酷な航海を想像する。『南極物語』で有名になったタロ・ジロの小屋もあつた。そして羊蹄丸はなんとフロートイング・パビリオン。実際にイタリアであつたか、万博で実際に船ごと展示されたそうである。『飢餓海峡』を、はたまた『津軽海峡冬景色』など、連想はとめどもなく浮かんで消える。なかは人形付き。これぞ万博。佐渡の金山の博物館にもあつた。最初は艦長人形の録音された挨拶から始まる。酔っ払いやリンゴ売りのおばちゃんの人形。『ゴジラの逆襲』のポスターもある。波で、揺れる展示物。気を許すと酔う。ユニークな展示物。

45 日本科学未来館「地下展——UNDERGROUND——」

地下がテーマという、目の付け所、が秀抜。しかしストライクゾーンに入れるか。ライティング、セットがドラマチック。当初はただ単に何も説明がないのではないかと思われるほどに小さなライトしなくて、全体がひとつの地下空間に見えるように工夫を凝らしていた。それでも若干のプロローグ的な部分があり、そして中へ(地下へ)入っていくのだ。いちばん興味を引いたのはへ5000年後の未来へ・松下電器・毎日新聞のタイムカプセル。EXPO70時の記憶。6970年へ。何を入れたかという点と、実際の小学生の作文へ僕には優しい父・母と、口ゲンカ相手の姉がいる。食べ物も錠剤になっているのでは？ 勉強もスキなときにスキなように自宅で、通うことなくいるのでは？。およそ40年。インターネットが可能にしている部分もあるか。やはり「地下」だけでは、なかなか興味の広がる展示はできなかつたようである。3月に「エイリアン展」を観た。へいや、いると思うよ。という秀逸なキャッチコピーに魅かれるとおり、バリエーションは遥かに宇宙物のほうがあつた。

22 松岡美術館

松岡氏という資産家とその財力で古くて良いものを集め、それを必死に一般大衆に見せようとしたのだと感心する。仏像も凄く古い。ヒンズー教の偶像などもある。ツタンカーメンのような棺の実物。紀元前1000年以上前のもの。棺には有名な顔、内側には絵があつた。洋画は見られなかつたものの、山種・五島よりも上。ここでは後にヘンリー・ムーアの彫刻展も見る。

【12月某日】 白金く渋谷 2館+1 (計49)

21 国立科学博物館附属自然教育園

大都会のど真ん中だというのに、まったくビル群が見えない。本当に高級住宅の代名詞・白金台なのかと驚く。ロケーションに興味を抱く。ここでは、汗ばむほどに歩き回ることができる。都会の喧騒は遠く、鳥の鳴き声が響く。歩き回るこの意味は意外性以外になかなか見いだせないけれど。

20 東京都庭園美術館 「ティファニー1837-2007」

上記と一緒に場所にある建物は風格も調和もあった。落ち着いて鑑賞できる。ところがいまのテーマはティファニー、ちっとも食指が動かない。たしかにきれいだと思っけれども、宝石にうっとりとしている女性たちの目にうんざりしてしまった。

○NANZUKA UNDERGROUND

「田名網敬一展——DAYDREAM」

衝動的に渋谷のギャラリーに降り立つ。女子高生と人魚、などの絶妙の取り合わせ。かつ迫力もあり、マンガに通じる凄味も感じる。色の奔流はできやよいにも通じよう。

【12月某日】 府中く三鷹く吉祥寺 4館+1 (計53)

54 府中市郷土の森博物館 村野四郎記念館・プラネタリウム

「おためし月面生活」

多摩川沿いの元マラソンコースを散歩がてらてくてくと。〈建物・

自然・水場など天然素材も含めて切り取ったネイチャー・アミューズメント・ミュージアム〉というコンセプトは素敵である。つまり、

自然そのものが展示品なのだ。村野四郎記念館も昔の小学校の建物に展示物があり、さりげない言葉に力があり、ポジティブな光を感じてはいなかった。だから今回が初となる。今日の夜空、という形で、今日の星空の状況が発表される。現代の弁士なのだと思う。リクライニングのとても気持ちのよい椅子で広くてのんびりできた。

50 三鷹市美術ギャラリー「トコトン！ 神沢利子展」

絵本がそのまま展示されている。〈春になるといいコトある〉など。可愛らしい絵本。ただ、あまり展示全体に興味は持てなかった。

○三鷹市 山本有三記念館

以前自分が在住していた三鷹市を歩く。20年以上。町全体がフラッシュバック・テーマパークとなっている。ジブリ美術館への道と重なり親子連れが目立つ冬。この記念館は実際に山本有三が暮らしていた家だという。ギンギン軌む。文字通り「路傍の石」が展示されている。かなり大きい。

49 井の頭自然文化園

動物にも自然にもうんざり、という心境。彫刻には勢いを感じた。広島平和公園の原型には驚く。分園には水族館的コーナーもあり。かみつきガメの巨大なもの、元ペットが巨大化か、ペリットに発砲スチ

ロールあり、ペットボトルなどは分解されないため注意しなくてはならないのだ。身近な自然破壊の問題。

48 武蔵野市立吉祥寺美術館

常設展だけがそれほど面白みを感じなかった。果実の絵。黒バツクにさくらんぼなどを観る。それより年の瀬の吉祥寺の人の多さに驚く。

【12月某日】池袋 1館+2 (計54)

38 古代オリエント博物館

このツアーというかアドベンチャーのきっかけを与えてくれた場所再訪。展示の仕方はきれいだ。説明も「めぐり」形式になっていて興味をそそるように努めている。とにかく感じるのはデイズニールランドなどのアミューズメントパークの発展により、一般の場所が停滞していることである。

○弥生美術館「ふろくのミリョク展」

手塚治虫の「ふしぎな少年や昭和37年製の「プロ野球背番号早見表」などを見る。紙の、実際には触れないながら手触りを夢想する。それでも懐かしいというより僕の時代には少し早いことを思う。

○竹久夢二美術館

「弥生」に隣接。四半世紀ぶり。学生時代に来た記憶がある。竹久の美人画にはそれほど感じるところはない。それより、この場所を探

してさまよった東大の古いたたずまいには魅了された。影の濃い部分がいい味を出していた。

【12月某日】竹橋 1館 (計55)

12 東京国立近代美術館「日本彫刻の近代」&常

高村光雲「抗夫」の迫力。岡本太郎の「燃える人」の奔放さ。ついに55館達成。自ら東京の街を自分なりの博覧会場にできた。

【記録】

数字はどうなったか。結論、新記録は残念ながら達成できなかった。55館どまりである。唯一、多摩六都科学館のみ、休館が長く、見ることができなかった。ならば、不可抗力か。いや、この冒険期間中、空いてない日があったわけではない。そのことはあとで認識した。やろうとすればできたのである。不注意も多分にあり、残念ながら記録は更新できなかったのだ。

なお、多摩六都科学館には翌年3月に達成。全天周映画「アフリカ・セレンケティ」なども鑑賞できた。アフリカの過酷な大自然のなかで生き物の姿が鮮烈に迫力たっぷりにとらえられていた。また、その3月までに「ぐるつとパス」2周目をはじめトータルのべ100館の美術館・博物館などに出かけることができた。替わりの新たな記録であった。

【発見】

西洋絵画は文章にたとえたと縦書きではなく横書きであること。だ

から時計回りで展示室の左側から回っていく。なるほどと思う。それから、音声ガイドの素晴らしさ。へキャプション(作品説明)とカタログは絵を見てから読む²⁾。その大切さを実感できた。へどんな作品でも先入観を持たないで見るのが望ましいのだが、実際には何の気なしに「タイトルは何だろう」と思つてキャプションを読んでもしまう。そうするとキャプションに説明してあるとおりにしか、絵が見えなくなる。自分自身のイメージの扉が閉まつてしまうのだ。逆に勘違いも含め、自分なりの見方をして、あとからキャプションの説明を讀んだりカタログの解説を読む方がずっと面白く、二倍に楽しめる³⁾。音声ガイドも同様である。用意されてある場合は必ず利用した。お金がかかっても絶対にわかりやすく、楽しめる。時間の余裕がない場合はすぐ聞いてしまうのだが、やはり理想はまず自分でじっくりと味わつてから解説を聞くことであろう。

【まとめ】

途中から、東京をひとつの万博に見立てる試みであると確信が持てた。何より楽しかった。初見の場所。なぜいままでこんなに近くにあるのに訪ねなかつたのか、と思う初めての場所が多かつた。いろいろな美術、工芸品、現代美術としてのビデオもアートとして認識できた。

最も素晴らしかつたのは森美術館と東京都現代美術館が双壁。もちろん企画展の中身による。パスさえあれば無料入場できる常設展はやはり無料である程度のものでしか残念ならなかつた。絵の単体であれば、パスの中には入っていないフェルメールか、会田誠の「美しい旗」か。

また、それに付随してJ・Rや地下鉄を駆使しての東京散策。六本木、お台場、多摩、これまでほとんど訪れることのなかつた場所を何か所も散策がてら歩いた。新たな興味が湧いた。生活にメリハリができた。裏テーマである減量は、運動し感動したあと食欲も増して、トータル1キロ増えていた。あんなに歩いたのに、意味がない。いや、心も体も健康である。秋から冬へ。季節の動きを感じた。現在の季節を満喫。次なる季節の匂い。また歩こう。そして我が創作に活かそう。その思いを強く抱く。

【後日談】

時がたち、「ぐるっとパス」もいまや70館を超える館数となった。離れた館も一部はあるものの、おおむね増加の一途。2009年には66館、2012年には75館まで膨れ上がっている。75といえば今度はメジャーリーグの年間最多本塁打記録、バリー・ボンズの73本(2001年・サンフランシスコジャイアンツ)を超えることになる。僕のなかで何かが動く。しかし、物理的・立場的にもはや容易な試みではない。とはいえ、単館でいくつか見る場合にもかなりお得であることは間違いない。これからも上手に利用するつもりであり、周囲にも是非にと勧めていきたい。

いまでは、印象派や岡本太郎、横尾忠則、会田誠と好きな作家の展覧会には何をおいても出かけるようになった。思えば、個人的にフックワークの軽い、自由度が高い時期に触れることができたのは幸いであつた。「知識ゼロ」だつたところに少しか数字がカウントできたようである。

〈参考・引用文献〉

- (1) 長谷川祐子 『女の子のための現代アート入門』
(淡交社 2010年) P 86
- (2) 山口裕美 『現代アート入門の入門』
(光文社新書 2002年) P 168
- (3) 同

— 太宰治「失敗園」を用いた朗読実践 —

間嶋 剛 小林雄佑

はじめに—指導者の「声」へのまなざし—

教室空間における「声」と言ったときに、どのようなものを思い浮かべるだろうか。おそらく最初に思い浮かぶのは、指導者の発問に対する回答や、各自の調査報告、学習者同士の話し合い活動などといった場面で聞こえてくる学習者の「声」であろう。それらは音声言語指導の領域において数多く研究されてきた。しかし、改めて教室空間を見渡した時、教室空間には看過できない「声」が存在することが分かる。それは、指導者の「声」である。

自身の授業実践を振り返ってみると、教室空間における重要な要素であるはずの自らの声を、ほとんど意識してこなかったことに気付かされる。こうした問題意識を共有する六名の現職教員が集まり、朗読グループを結成した。これまで行ってきた勉強会で、学習者の声を活性化させる役割としての指導者の声に着目してきた。学習者の主体的な〈読み〉を導く指導者の「声」、そしてその授業方法とは、どのようなものだろうか。

この問いを明らかにするために、まず、指導者の声と学習者の解釈の影響関係に着目した。これを検証する場として二〇一二年七月二一

日に行われた早稲田大学国語教育学会研究部会「朗読の理論と実践の会」が主催する「朗読実践への提案 I N 早稲田二〇一二」(以下、「朗読実践への提案」とする)で発表を行う機会を得た。そこでの発表の成果は、本稿で報告する授業実践の基礎となるものである。

題材として選んだのは太宰治「失敗園」である¹⁾。本稿では、文学作品としての「失敗園」の意義づけを視野に入れつつ、朗読教材としての「失敗園」の価値を探った。

一節では、現在あまり注目されていない「失敗園」の作品を紹介し、その中で作品としての可能性に言及した。二節では、学習者の主体的な〈読み〉／〈解釈〉の前提となる指導者の朗読について考察を行う。まず指導者の朗読が、学習者の学習活動にどのような影響を与えるかを考察し、指導者の朗読の位置付けを見直した。そして、そのような影響関係が、どのような要素に起因するものか、「役割語」という概念を援用して分析した。この分析を踏まえ、「朗読実践への提案」および中学一年生を対象とした調査を行い、指導者の声が学習者の解釈に与える影響を検証した。その結果、「役割語」を意識した朗読が、聞き手の解釈に幅をもたせることが明らかになった。それが学習者同

士の議論を活性化させる要因となり、その議論が個々の学習者の主体的な解釈をもたらすと仮定し、朗読を主たる学習活動とした指導案を構想した。

三節では、右の授業実践の報告と考察を行う。これにより朗読実践を教室空間で行う際の指導者の声が果たす役割を明らかにする。

一 教材としての「失敗園」

「失敗園」は、語り手「私」の「陋屋」にある「六坪ほどの庭」を舞台にした物語である。その庭は「妻」の手によって植物たちが「秩序も無く」植えられており、「私」はそれを「すべて失敗の様子」と断じる。そしてそれら失敗作である「恥づかしき身なり」の植物たちが「囁く」声を「速記」したというのが「失敗園」のおよその構成である。

作品に用いられる植物による語りとその速記という形式は、フランスの小説家ジュール・ルナールにその着想を得たといつてよい。冒頭における語りの末尾に、「必ずしも、仏人ルナル氏の真似でも無いのだ」という言葉が添えられていることから明らかである。ルナールといえば『にんじん』(一八九四)が今日でも著名だが、ここでは『博物誌』(一八九六)がそのモチーフとなっている。『博物誌』はルナールによる自然観察とそのスケッチで、その対象は植物、昆虫、動物など多岐に亘る。「失敗園」と同様、対象ごとに項目が分けられ、端的な表現でその生き物のあり方が生き生きと、ユーモラスに描写されている。そうした端的な表現による洒落さは、本作にも現れているといえよう。

「失敗園」は比較的平明な内容の小品である。そのせいかこれまでの太宰研究のなかで「失敗園」そのものを取り上げて論じたものは管見の限りほとんどない。田中励儀は「失敗園」の時代的背景を踏まえ、作品発表当時における「庶民生活が圧迫されつつある時局への対応」、「作者の自己戯画化」などを論点としてあげ、「日中戦争下の太宰の作家姿勢を示す、ひとつの指標と位置付けることはできそうである」と述べている²⁾。

一九三一年に発生した満州事変以降、文壇では作家による実体験あるいは現地取材を題材にした、自然主義文学に通じる面を持つ報告文学などが流行し、事実をありのままに描く作家の眼や、作品の当事者性がリアリズムとして求められた。蘆原英了は「大体、ルポルタージュと云ふものは、極度に己れを殺して、見たままを、感じたままを、素直に、透明に表現すればいいのである」と述べる³⁾。速記という生の息遣いを伝える表現形式はそうした期待にこたえるものであった。

また同時に、芥川龍之介がその晩年「文藝的な、余りに文藝的な」において「小説の破壊者」として名を挙げる自然主義文学の破壊者たる「ルナル」の手法は、題材の強烈さに依存しないという点で、報告文学などと差異化を図れるものでもあった⁴⁾。流行を踏まえつつ、それら氾濫する様式との明確な差異化を期すという意味で、繰り返し実験小説を描き続けてきた太宰らしい作品だといえるだろう。作家としての自意識、芥川との関わりも垣間見ることができよう。

以上のことを踏まえると、以下の点において「失敗園」の教材としての価値が認められる。

第一に、「失敗園」の持つ『博物誌』に依拠する平明な表現は聞き

手にとって理解しやすい点が挙げられる。読み手と聞き手という相互的な関係に慣れていない生徒でも入ってきやすいものといえる。描写も端的であるため、途中で文脈を見失うということもないだろう。

第二に、速記という形式は会話をそのまま聞き書きしたという体で表現されている点が指摘できる。これにより、実際に発声するという行為との格差が生まれにくい。黙読から音読へと比較的容易に転移できるのである。会話を実際に声に出して表現することは、ほぼ会話によって成立する「失敗園」を理解する重要な方法といえるだろう。それによって、生の息遣いを再現した速記形式が生きてくるのである。

「失敗園」には個性的な植物たちが多数登場する。一定の人物像がある程度容易に読み取ることができるのであれば、目標がはっきりしてそれに向けての練習も行いやすくなるだろう。以上のことから、「失敗園」の持つ作品的特徴が教材としての価値に結びついてくるのである。

二 指導者の朗読が学習者の解釈に与える影響

二一 指導者の朗読の構造

文学作品を用いて学習者の主体的な解釈を育む指導は、近年さかんに議論されている。文学作品を扱う授業について、浜本純逸は「作者の意図や作品の主題を求めて一つの正解を教える時代」から「学習者の主体的な読みを交流して深めていこうとする方向へと発展してきた」と指摘する^⑤。具体的に「学習者の主体的な読み」を表出させる方法として中村佳文は、「様々な意見交換を経て一つの表現として出力する」方法の中で「最も手軽に実施できる」ものは「朗読」である

としている^⑥。

そもそも、朗読行為の構造とはどのようなものだろうか。長年朗読の指導にあたってきた東百道は、朗読活動には次の三段階があるとしている^⑦。

Ⅰ 朗読者が文学作品(台本)の文字言語を自らの認識イメージとして認識していく段階

Ⅱ 朗読者が自らの表現イメージを想像・創造しつつ現実に再表現していく段階

Ⅲ 聞き手が朗読作品としての音声言語を認識していく段階

ここで東が言及する朗読活動の形式は、教室空間に限らない広い意味でのそれである。これを、学習者の朗読を中心とした授業実践に当てはめて考えてみた場合、学習者が作品理解を深めていくⅠ、その解釈を基に実際に声に出して表現するⅡ、他の学習者の朗読を聞き相互交流を行うⅢと言い換えることができる。

しかし多くの実践の場合、学習者によるⅠの段階には、さらに前段階のあることが指摘できる。

それは、学習者が行うⅠⅡⅢの過程を、指導者が行う段階である。すなわち、指導者自身が作品の解釈を深めるⅠ、その解釈を学習者に示すⅡ、さらにそれを学習者が受け止めるⅢである。学習者によるⅠはその上に成立する。学習者の朗読活動には、潜在的に指導者によるⅠⅡⅢの活動が伴うのである。

こうした流れを持った朗読実践は珍しいものではない。このような

授業形式の場合、学習者の朗読は指導者の朗読を基盤として行われることになる。そうであるならば、指導者の朗読が学習者の「再想像・再創造」に強い影響を与えることは確かであろう。このときの指導者による朗読は、学習者に「範」を示すという意味での「範読」の役割を明確に担っているといえる。学習者による朗読を想定した授業のみならず、「範読」を用いた多くの場合においても同様であろう。

それにも関わらず、我々はこのような学習者の解釈に基づく朗読の構築過程に強く影響を持つ「範読」について、どの程度自覚的であったろうか。本朗読グループのメンバーも、これまで指導者の朗読すなわち「範読」が教室空間で持つ役割について自覚的であったとは言えない。

一般的に「範読」とは「目の前の聞き手を意識した、ひとつの手本となるような読み方」(『音声言語指導大辞典』)と定義されている。^⑨しかし、高橋俊三によれば「範読」には、「規範的な音声言語を指導する」側面だけでなく、文学作品の「鑑賞行為に供する」側面があるという。^⑩これまで我々は、前者の「規範的な音声言語を指導する」側面、すなわち漢字の正しい読み方などに意識を向けており、後者の「鑑賞行為に供する」側面、すなわち聞き手の解釈を具体的に手助けしていくような側面について注意を払ってきたとは言いがたい。そのことは、朗読実践に関する多くの蓄積をもつ中村佳文が範読について「主に指導者が学習者に読み聞かせるために、模範的に読む」と述べるところとどまっていることから読み取れる。^⑪もちろん、教育現場の中心では、こうした点について配慮した実践を行っている指導者がいることも確かだろう。しかし、範読に関する研究成果を概観したとき、

後者の側面に関するものが十分に蓄積されているとは言えないのが現状だ。

学習者の朗読の構築過程においては「多様な意見の調整自体を、学習者同士が折り合いを付けていくという過程にこそ、意義深い学習効果が存在する」と中村は指摘している。この「意義深い学習効果」とは、浜本の指摘する「交流による読みの深化」による主体的な解釈の獲得に繋がるのだ。範読が学習者の解釈とそれに基づく朗読に影響を与えることは既に述べたとおりだが、こうした学習者の「調整」・「交流」を成立させる範読には、範読の持つ二つの側面に対する配慮が必要となるのである。

二―二 「役割語」を意識した朗読の提案

我々はこの問題意識に基づき「朗読実践への提案」において、読み手の朗読と聞き手の解釈の影響関係を確認するための発表を行った。この発表は、授業実践に向けた発表として位置付けられる。その際グループは金水敏の指摘する「役割語」の概念を援用した朗読の方法を考案し、発表した。^⑫

「役割語」とは、ある「特定の人物像」を想起させる機能を持つ言葉遣いのことを指す。金水は「日本語の役割語にとつて特に重要な指標は、人称代名詞またはそれに代わる表現、および文末表現である」と指摘している。「失敗園」に登場する植物たちの発言は、「役割語」で溢れている。それに伴いその人称代名詞および文末表現も多岐に亘っている。これら人称代名詞と語尾を意識せずに、もしくは過度に意識して読むことは、指導者の解釈を聞き手に押し付けることになり

かねない。活発な議論を促すためには、特定の解釈を押し付けられない範読が必要となる。学習者の主体的な解釈は、このような指導者の範読に基づく自覚的な解釈行為によって生まれる。学習者が解釈行為に自覚的になるには、「多様な意見の調整自体を、学習者同士が折り合いをつけていく」過程が必要なのである。

そのため「朗読実践への提案」の発表においては以上の点に注意し、「役割語」を強調しないように意識した朗読（以下、「役割語」を意識した朗読」とする）を行った。

既に似たようなアプローチとして荒木茂による「表現読み」という概念が存在する^①。しかし、「表現読み」はその動作主体が学習者自身であるのに対して、本稿で提示している「役割語」を意識した朗読は、学習者の解釈への影響を考慮して行われる指導者の朗読である。二つの方法には、動作主体と、その目的において明確な差異が存在する。

これまで述べたような「役割語」への着目を、いかに具体的に音声表現に取り入れていくかという点については、様々な舞台作品の演出を手掛けてきた鴻上尚史の「声の要素」の五分類を参考にした。鴻上によれば、声には「大きさ」「高さ」「速さ」「間」「音色」の五つがあるという。具体的な例として「速さ」「音色」に着目した「ねぎ」を挙げる。

「ねぎ」は「我輩」や「給へ」などの威厳のある老人を思わせる役割語を用いている。そのため、老人のような過度にしわがれた「音色」を用いないように配慮した。また、役割語から想起されるステレオタイプな老人のイメージを表現するようなくくりとした「速さ」で読むことを避けた。この他に、役割語である「我輩」の語頭「わ」を強

調しないように読んだ。これらは、語頭「わ」を強調することで「ねぎ」の印象が一面に限定されてしまうこと避けるためである。

ここでは「ねぎ」を例にして述べたが、「にんじん」の人称代名詞である「わしや」や「ネムの苗」の語尾「花が咲くのよ」など、ほとんどの植物が「役割語」を用いており、同様の配慮を全体に対して行った。

二一三 「役割語」を意識した朗読の検証

本朗読グループは右のような方針に基づき二つの検証を行った。一つは、「朗読実践への提案」での発表であり、もう一つは中学一年生を対象として行った検証である。

まず「朗読実践への提案」では、聞き手の受け止め方を確認するために、自由記述形式のアンケートを実施した。なお、「朗読実践への提案」における参加者（聞き手）は、早稲田大学の設置科目である「授業に活かす朗読講座」を履修している学生を中心に、公立高校の生徒、現役教員や俳優など、朗読に興味・関心のある人々である。

アンケートは五八名からの回答を得た。寄せられた回答の多くは、朗読の巧拙に対するものであり、それらは概ね高い評価であった。また全回答のうち、本文に対する解釈や登場人物の人物像に関するものは二三件あった。この回答を見ると、「失敗園」全体の雰囲気に対する聞き手の解釈が多くあった。以下に挙げる三点はその例である。

- ① 役の演じ方に個性がそれぞれ出ていて、にぎやかさが伝わってきました。

② どこか悲しみに暮れている野菜たちの声が届いてきました。(中略) ネガティブな朗読内容にも関わらず、よく声が届いていました。

③ けだるげな中になんとか笑ってしまふ要素があつて引きつけられた。

①は作品に「にぎやかさ」を読み取っており、それに対して②は「ネガティブ」さを読み取っている。その一方で、こうした明るさと暗さといった二極化した解釈ではなく、③のように「けだるげな中」に滑稽さを見出し、それを作品の魅力として評価した、二項対立的な解釈に落とし込まない聞き手も存在した。ここには、それぞれの「失敗園」に対する解釈の相違が現れているといえよう。したがって、本朗読グループの「役割語」を意識した朗読が聞き手の解釈の幅に影響を与えるものであることが確認できた。

一方で、「範読」を「〈読み〉の一例」として捉えた場合、必ずしも個性を抑え過ぎなくてもよいのではないかと思う」という意見もあった。こうした批判のように、一つの極端な朗読を行うことで、聞き手に違和感を抱かせる可能性を用意し、議論させるといふ実践方法も考えられる。しかし、たとえば明るい・暗いというどちらか一方に偏った朗読を聞き手に提示した場合、聞き手の解釈はそれに沿ったものか、あるいはその対極となるような解釈に限られる恐れがある。それは、各自の解釈を踏まえて議論をし、それぞれの解釈を深化させ、主体的な解釈を獲得していくという学習には発展しない。

このことを確かめるために、次のような検証を実際の教室で行つ

た。「朗読実践への提案」で扱った「失敗園」を指導者がクラスごとに異なる朗読を行い、それにより学習者の作品に対する印象がどのように変化するのかを確認した。具体的には、本文の(A)暗さ、倦怠感を強調した朗読、(B)明るさ、滑稽さを強調した朗読、(C)本朗読グループが発表したような「役割語」を意識した朗読の三パターンを、中学一年男子三クラス(各クラス約40人)に割り振った。この朗読を各クラスで行ったうえで、「作品をどのような雰囲気だと感じたか」という問いに記述式で回答させた。

その結果、(A)暗さ、倦怠感を強調した朗読を行ったクラスでは、全体的な印象を記述した学習者のうち作品の印象を「暗い雰囲気だった」「気力がない」などネガティブにとらえるものが二三人あり、明るさ、滑稽さなどの印象を記述した学習者はいなかった。これは、もともと本文には、退廃的なイメージを引き起こすような語句が多く用いられている点や、「何度も自殺を試みた」などステレオタイプでられる太宰という作家の印象も相俟ってそうした解釈に陥りがちである点がその要因であろう。が、加えて暗さを強調した指導者の朗読も影響した結果と考えられる。

一方、(B)明るさ、滑稽さを強調した朗読を行ったクラスでは、ネガティブな印象を受けた学習者が九人、「にぎやかだった」「なごやかだ」などポジティブな印象を受けた学習者が七人と拮抗した。(A)の朗読と比して、ポジティブな印象を持つ学習者が増加し、ネガティブな印象を受けた学習者が減少し、学習者の解釈が拮抗していることがわかる。

前記二通りの朗読では、それぞれの朗読方法に従った解釈が提示さ

れたが、(C)「役割語」を意識した朗読を行ったクラスでは、ネガティブな印象を書いたものが二人、ポジティブな印象を書いたものが三人と、(A)(B)それぞれの朗読のおよそ中間値をとっている。本文の語句などから暗い方向の印象を抱きやすい作品ではあるが、指導者の朗読によって学習者の印象を左右することが確認された。すなわち、指導者が暗く読んだ場合には学習者は暗い印象を抱き、明るく読んだ場合には学習者は明るい印象を抱く傾向がある。「朗読実践への提案」での成果と重ねて、指導者の朗読が学習者の解釈に恣意的な影響を与えうるということが指摘できる。であるからこそ、「役割語」を意識した朗読とそれを基盤とした議論が、学習者の主体的な解釈を重要視する場合に必要となるのである。¹⁴⁾

三 学習者の「声」を生かす授業実践の報告

三―一 実践指導案

これまでの考察を踏まえ、学習者の朗読を主たる学習活動とする授業実践を、獨協中学・高等学校において中学三年生四クラスを対象に行った。題材は、「朗読実践への提案」でも用いた「失敗園」である。

これまでの方針に従い、次に報告する実践案では学習者の議論による「読みの深化」を重要視した。これらの学習は二時間目に相当する。各植物の解釈、表現を決定する過程が、学習者それぞれの読みの「深化」を促すだろう。以下、実践の指導案である。

単元名 六つの声を響かせよう―太宰治「失敗園」を用いて―
学習者 獨協中学三年生の四クラス(各約二〇名)

学習目標

- 一、指導者の朗読を聞き、作品の登場人物に対する印象を持つ。
- 二、班での議論によって、各自が作品の解釈を深める。
- 三、班での解釈に基づく朗読発表を行う。
- 四、他の学習者の朗読を聞いて、自分たちの朗読を振り返る。

学習の展開 配当時間は全三時間とした。

【第一時】

第一時では、あらかじめ「失敗園」の台本を配布し、指導者が「役割語」を意識した「失敗園」の朗読を行う。¹⁵⁾ その際、登場する植物たちの印象、および指導者の朗読に対する感想を書かせる。その上で班分けを行い、自分の担当を決めさせる。授業終了時に台本を回収する。

【第二時】

第二時では、本文解釈と台本作り、および朗読練習を班ごとに行わせる。議論を促すため、第一時に台本に書きこまれた各植物の印象をまとめたプリント、本時の学習の全体像、および朗読練習を行う手順を示した手引きを各班に配布する。活動の中で、「班で決まった植物の人物像」を台本に書き込ませる。第一時と同様に授業終了時に台本を回収し、班内での話し合いを経て形成された各班の植物に対する解釈(人物像)をプリントにまとめる。

【第三時】

第三時では、班ごとの発表と他班の発表の評価を行う。まず、朗読練習を行わせる。その際、班内での話し合いが滞り、朗読練習が円滑に行えていない班には、前時に他の班が形成した人物像について、指導者がまとめたものを参考資料として活用する。その後一班ずつ、

前に出て発表させる。〈前半〉と〈後半〉の二班で一セットとして発表させる。最後に、自身の班の朗読と比較した評価を学習者につけさせる。

三十二 実践の成果

学習者が各自の解釈を交流させ、深め、それを表現することが本実践の目標であった。その観点に基づく本実践の成果の一つは、解釈の積極的な交流がほとんどの班で行われたことである。第二時では、各植物の人物像について、議論による調整が行われた様子を確認できた。議論の過程において、指導者は各グループを巡回し、解釈の糸口をつかみかねているような状況に対して助言を行った。

ここでは指導者による授業の観察や、台本に付属する解釈の議論メモ欄を基にした議論の具体例を挙げる。

ある班では「棉の苗」の解釈について、学習者A「現実をわかっている人」、学習者B「疑い深い」、学習者C「自分のことを他人のことのように言っている」、学習者D「自分が座蒲団になるから誇らしげ」、学習者E「義姉、自分のことを小さく見すぎ」などとしている。台本付属の解釈の議論メモ欄には、相互の解釈が書き込まれており、意見交換が行われた様子が確認できる。この班の「棉の苗」に対する最終的な解釈は、「希望があるのに、今の自分との差がありすぎて自分で自分を笑っている」というものであった。

ここで注目したいのは、誰か一人の意見を肯定し、それに追従したというわけではない点だ。最終的な解釈をそのまま意見として挙げている者はいない。班員各々の意見をみると、それぞれの意見が、最終

的な解釈につながっていることがわかる。

しかも、もともと「誇らしげである」や「疑っている」など一面的であった解釈が、それぞれの解釈を摺合せ、「棉の苗」の人物像を形成しているのである。単純に意見が一つに落ち着いた、減ったのではなく、一人一人の意見が交流によって発展的に統合された結果とみてよいだろう。異なる解釈を積極的に交流させることで、学習者の読みが深化した一例といえる。このような議論は、全ての班において、全体を通してとは言えないまでも、個々の植物に対しては、行われていた。

これらの事象が示すのは、学習者が自分の解釈とは別の解釈に班の中で出会い、それらの調整を行った、ということである。学習者の朗読の構築過程においては「多様な意見の調整自体を、学習者同士が折り合いを付けていくという過程にこそ、意義深い学習効果が存在する」¹⁶⁾のである。こうした議論の基盤となったのは、本稿で提案し、指導者が実践の冒頭に行った「役割語」を意識した朗読なのである。本実践のもう一つの成果は、学習者がそれぞれの解釈を朗読という形で表現できたこと、さらにそれに伴い必要な表現上の工夫を施せたことである。

先に述べたような議論の過程を経て、各班は作品全体や個々の植物たちに対する解釈を深めていった。それを教室空間で他の班に朗読という形で提示し、さらに交流を行う学習活動を行うことができた。たとえば、ある班に指導者が「薔薇」の人物像に対する解釈を尋ねたところ、「周りの全てを見下す」という回答を得た。その人物像を表現するための方法を尋ねたところ、「語頭をあげて読む」と答えた。

議論を経て、最終的なグループの解釈は「周りを見下す、主人を嫌う、自分が一番上」というものとなった。

発表会では、より完成度の高い形で練習の通りに読んでいた。その結果、他の学習者から「女王感が出ていた」や、「主人を嫌う様子が分かった」など、表現意図に沿った評価を得ていた。同様の事例は他にも多く認められ、各班の解釈に基づき、朗読をする努力が行われていたといえる。

三十三 実践の課題

このような成果が認められる一方で、課題が残る実践でもあった。それは、本文に数多く登場する「役割語」に引き寄せられ、ステレオタイプに陥った解釈に基づいた朗読を行った班が散見されたことである。「失敗園」を題材として選択した根拠として、個性的な植物たちが多数登場し、その個性の細かな差異を論じ、学習者それぞれの解釈・表現を行うことが期待される点を挙げた。しかし、実際には複数の班が本文から安易に読み取れる植物たちの表象に引き付けられ、それを更新できずにいた。

たとえば、ある班では、当初「頭が悪い」、「植物の育ちが良くないのを妻のせいになっている」「性格が悪い」「自分勝手、高慢」と、主人を非難するような解釈のみ見られた。しかし、解釈の議論メモ欄には、「冷静」「低め」「落ち着いている」などの言葉が記述され、最終的には主人を「落ち着いたおじさん、冷静な人」と解釈している。

ここで重要なのは「高慢」などの主人を非難するような解釈が、「冷静な人物」という無難なものに落ち着いた点である。ここでは議論を

通じて解釈が単純化し、後退したとすらいえるかもしれない。主人の「愚妻」「失敗」「恥ずかしき」などといった言葉を見逃さない解釈は、むしろ深みを持つているともいえる。ここに、異彩を放つような解釈が淘汰され、無難なものに落ち着いてしまうという話し合い活動の注点を指摘できる。

だが、中村の言葉にもあるように、正解のない議題における意見調整は、それ自身が重要な学習的意義を持つ。解釈の単純化や後退は、正解もなく容易に評価基準を設定しがたいが、議論への取り組みとその成果は十分に評価できる。

しかしながら、先の例のようにステレオタイプな解釈にとどまったり、一面的な解釈になってしまったりした班が存在したことも確かである。これは、本朗読グループの行った「役割語」を意識した朗読の問題点を浮かびあがらせる。すなわち、この方法では各植物の人物像に対する主体的な解釈の基盤を与える一方で、学習者の状況や題材となる作品によっては、かえって解釈は曖昧なままに終始し、初発の印象を深化させうる活発な議論の基盤とはならない可能性もある。

「役割語」を意識した朗読を用いた授業を実践する場合、学習者の学習経験に配慮した入念な指導計画と題材選びが求められるのである。

おわりに

これまで指導者の朗読は、学習者の〈読み〉の構築に対して影響力を持つにも関わらず、少なからず無自覚のままに行われてきた。それは学習者の声を考える上で、指導者自身の声を軽んじてきたことによるのではないだろうか。

本稿では、「役割語」を意識した朗読を学習者の議論を活発化させるための指導者の声として位置づけた。これにより、学習者は自らの解釈行為に自覚的になり、主体的な解釈を行うようになる。

主体的な解釈に基づく朗読を行うことよって、学習者は積極的な朗読を行うことが可能になるのである。実践後の振り返りをみると、ある学習者が「台詞を言うときはそのキャラの個性を考えて言う必要があることがわかった」というように、解釈と自身の朗読活動を結び付けて評価する者が多かった。

今回の実践からも明らかのように、指導者の声は、学習者の解釈を導く重要な要素として位置付けられる。そしてそれは、豊かな朗読活動に寄与するものである。

〔付記〕

朗読グループのメンバーは、執筆・授業実践者である本校講師間嶋剛、同小林雄佑に加え、甲斐伊織（早稲田大学教育学研究科博士課程・早稲田大学本庄高等学院講師）、永瀬恵子（同修士課程・学習院中等科講師）、朴木達樹（同修士課程・中央大学付属中学校講師）、堀本嘉子（日本大学院文学研究科修士課程・聖パウロ学園高等学校エンカレッジコース講師）。早稲田大学国語教育学会に所属する教員によって構成される。本実践は早稲田大学国語教育学会研究部会「朗読の理論と実践の会」の一部である「朗読実践への提案ⅠN 早稲田二〇二二」において発表したものを踏まえて執筆した。貴重なご意見を下さった方々、および実践の対象となった本学生徒に、改めて感謝いたします。

注

- (1) 『東西』（月刊東西社、一九四〇年九月）
- (2) 「失敗園」論 『太宰治研究Ⅰ』（和泉書院、一九九九年六月）
- (3) 「当事者の心理―従軍記のことなど―」 『文体』（一九三八年二月）
- (4) 『改造』（改造社、一九二八年四月）
- (5) 浜本純逸監修『文学の授業づくりハンドブック 授業実践をふまえて 第4巻』（溪水社、二〇一〇年三月）
- (6) 『声で思考する国語教育 〈教室〉の音読・朗読実践構想』（ひつじ書房、二〇一二年四月）
- (7) 『朗読の理論 感動を作る朗読を目指して』（木鶏社、二〇〇八年三月）
- (8) 「範読」という用語自体への批判的な論も存在するが、本稿は「範」のもつ多面性とその意義を指摘するものである。
- (9) 肆矢惇恵「範読」高橋俊三編『音声言語指導大辞典』（明治図書、一九九四年四月）
- (10) 「教師の朗読（謂ゆる「範読」）の教育的意義と性格」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 四〇巻』（一九九〇年三月）。学習者の解釈の幅を担保する方法として、指導者の朗読を介さない黙読という方法が考えられるが、高橋の指摘する範読の二面性は黙読の欠点を明らかにする。指導者が範読を行うことで、学習者は「規範的な音声言語」を学ぶのである。荒木茂は、「黙読指導とは、音読時の豊かな表情音声を中心に化して黙って読んでいてもそれが瞬時に思い浮かべて読め

るようにする指導である」(『音読指導の方法と技術』一光社、一九八九年五月)とし、規範的な言語を十分に学ばない段階で行われる黙読指導を批判している。

(11) 注6に同じ。

(12) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』

(岩波書店、二〇〇三年一月)

(13) 「表現読み」とは、「表現内容が読み手に要求するものだけを音声表現する」方法である。すなわち、通常の朗読で考えられる群読など様々な手法を排し、かつ「棒読みで一本調子な音声表現を排除」した朗読方法であるという。

(14) 『表現読み入門 その理論と実際』一光社、一九七九年七月)その後、各クラスにおいてこの結果を提示し、なぜこのような差異が発生したのかを議論する授業を行った。

(15) 今回の実践で使用した「失敗園」は「だいこん」と「へちま」をカットした簡略版である。またネムの苗までを「前半」、にんじんからを「後半」とした。本文下の空欄には、各植物たちの人物像を記入するようになっている。上段には指導者の朗読を聞いた時考えた人物像、中段には班内での議論をし、他の学習者の意見を聞いて考えた人物像、下段には班内での議論を経て決定された人物像を記入する。これにより、学習者は自分の植物に対する解釈の変遷過程を意識化することができる。

(16) 注6に同じ。

origin), “flame” (French origin) and “conflagration” (Latin origin). “Fire” would be the easiest word to understand and is suitable in any type of context. If you use “flame” instead of “fire”, some poetic sentiment would accompany with it. “Conflagration” sounds academic, on the other hand, and the scientific explanations are expected to follow. In this way, different types of vocabularies have enabled English people to express subtle nuances and to foster psychological perception for them.

Through the examples of Japanese and English, I have given a brief overview into how languages relate with people’s cognitions and how they can enrich the culture in which they are used. If we understand the organic nature of language rightly, language would surely keep working as an inestimable system to explore our thought-world, and to cultivate our culture.

Works Consulted

- Francis, W. Nelson. (1998). *Word-Making: Some Sources of New Words. Language: Readings in Language and Culture. Sixth Edition.* New York: St. Martin's Press. 154-165.
- Lucy, John A. (1992). *Language Diversity and Thought: a Reformulation of the Linguistic Relativity Hypothesis. Studies in the Social and Cultural Foundations of Language. 12.* Cambridge University Press.
- ... (1996). *Grammatical Categories and Cognition: a Case Study of the Linguistic Relativity Hypothesis. Studies in the Social and Cultural Foundations of Language.13.* Cambridge University Press.
- Maynard, Senko K. (1997). *Japanese Communication.* Honolulu: University of Hawaii Press.
- 石川九楊 (2005). 『「二重言語国家・日本」の歴史』東京：青灯社 . 323-331.
- E. サピア・B. ウォーフ (1970). 『文化人類学と言語学』池上嘉彦訳 . 東京：弘文堂 . 65-81.
- 村上春樹 (2009). 『1Q84 Book3』東京：新潮社 . 210.
- 渡部昇一 (1988). 『英語の歴史』東京：大修館 . 213-214.

(中略)

「だからつまりどこにいても同じだと」と天吾は言った。
「アンゼンなところなんてない」とふかえりは繰り返した。

(1Q84 Book3 210)

Here, Fuka-Eri is repeating the word “安全” (anzen) after Tengu used it, but it is written in katakana (アンゼン). It makes us feel that Fuka-Eri might not know what Tengu really means by the word “安全” (security), and that they might have a different range of vocabulary and cognition. In the texts mainly consisting of hiragana and kanji, katakana effectively makes her strangeness conspicuous. In this way, in literary texts, the syllabic system greatly helps arouse some feeling in the reader’s mind and affects the interpretation or recognition of the contexts. Here we can see that a certain language system has an influence on the way people share the same cultural background recognize things.

These syllabic systems play another important role in Japanese culture: a medium for adopting vocabularies and thoughts from other cultures. With regard to this function, Senko K. Maynard who studies the loanwords appeared in Japanese media made the following suggestive comments: “Today, most Chinese words in the Japanese language are written in Kanji. [...] Western loanwords are written in katakana, [...]. Loanwords make a text seem modern and sophisticated. Other functions include use of the brand names, loanwords that introduce concepts otherwise nonexistent in Japan, technical terms, and euphemisms. American (and western) images sell well in Japan” (Maynard 66-68). As she says, katakana and kanji have been used to borrow words and concepts from other cultures, because they could save time and trouble in “translating” difficult foreign terms. In other words, they have been contributing to enrich Japanese vocabulary, the way of thinking, and the culture.

It is necessary, however, to avoid concluding immediately that such linguistic varieties should directly indicate the extent of cultural maturity. No one would agree with such an idea that the more syllabic systems a language has, the higher the quality of the culture where it is used is. For example, many western countries, where the alphabet is used as the only syllabic system, have highly developed cultures. Each language has its own way to absorb a new idea and different ways of exploring the cultural fields. Looking back on the history of the English language, for example, you will find English people absorbed and digested the “advanced” culture of ancient Greek, Rome, and France mostly by proliferating vocabularies. Now “English has the largest vocabulary of any language in the world—over 600,000 words—in part, at least, because English has borrowed words from every language with which it has had any contact”(Francis 154). Using various ways of word formation such as affixes and the simple system of alphabet, which is common in many western countries, the English language has succeeded in increasing its vocabulary. Now it has three different types of vocabulary: classic (Greek, Latin origin), literary (mainly French origin) and familiar (Germanic origin). For example, there are three different words for “light and heat that are produced when burning something” in English: “fire” (German

Language, Thought, and Culture —A Brief Insight into Their Relations—

Ruiko Kawabe

Language is sometimes compared to an organism like a tree living on the soil called culture. Not only does it absorb the nutrition, however, the tree of language can also cultivate the thought and culture on which it grows.

The idea that languages have a close relationship with cultures in which they are used has been endorsed by many scholars. Benjamin Lee Whorf offered his famous theory based on Sapir that large-scale linguistic patterns in particular languages relate with the habitual concepts which speakers of those languages use in interpreting reality (Lucy 62). While he focused on grammatical theory, the Russian psychologist L.S.Vogotsky discussed the same issue with special regard to the function of the language in sociological context, and stated that particular language system occurs in particular society and culture (Maynard 3-4). Although these theories differ in their points of view, both of them are pointing out the existence of indirect but close interaction among language, thought, and culture.

To consider this interactive relationship among language, thought, and culture, it would be very useful to think about Japanese through three syllabic writing systems, that being katakana, hiragana, and kanji. Derived from the same origin (Chinese characters), each of these systems has assumed a different role in present Japanese: they provoke different images in people's minds. For example, you never see Japanese fashion magazines intended for youth without finding a large amount of katakana, because katakana can evoke a new, fashionable image. On the other hand, traditional or adult-oriented products tend to be promoted in kanji, which can make them look solemn or something authorized in its culture. While kanji seems an effective device to convey the message instantly since each has a connoted meaning in itself, hiragana is useful for softening or blurring such fixed images that some kanji have. For example, people who have physical or mental disabilities used to be assigned the kanji “障害者”(shougai-sya), but recently the kanji “害” has been replaced with the hiragana “がい” to avoid the negative image the kanji “害” would give: its original meaning is “harm”.

Literature is another example to show the effect language can have on thought and culture. Japanese writers often use katakana to call up a sense of strangeness in a reader's mind. A good example is found in the novel 1Q84 by Haruki Murakami. The following scene depicts Tengu (天吾)'s confusion about the unexpected visit by a mysterious girl Fuka-Eri (ふかえり), in which he is trying to explain how dangerous it is for her to stay in his apartment.

「繰り返すようだけど、ここは安全じゃない」と天吾は言った。「僕はある種の人々に目をつけられているみたいだ。どういう連中なのかまだよくわからないけど」「アンゼンなところなんてない」とふかえりは言った。

墓前に手を合わせる。永住権も経験もない外国人に仕事を与えてくれたこと、授業崩壊で悩んでいたときはいつも励ましてくれたこと、翌年も仕事を継続できるようにいろいろ掛け合ってくれたこと、ニューヨークを離れると伝えたとき残念そうな顔をしてくれたこと、それでいながら、再就職のための推薦状を書いてくれたこと、すべてのことを感謝した。帰国後も休暇を利用してブロンクスを訪れたときは、真っ先に会いに来てくれた。そしてその時は、私のことを部下ではなく、friend だと呼んでくれたことも思い出した。

その日の晩は、私が戻ってきたのを知って、かつての同僚たちが集まってくれることになっていた。場所は、Lincoln 高校近くのイタリア料理店。Maria も来るのかな、そんなことを考えて、感傷的な思いを振り払おうとしていた。

日本に帰るまでまだ猶予がある。すべての可能性に賭けてみようと、全米を旅することにした。日本人が多いといわれるカリフォルニアなら、多少のチャンスはあるかもしれない。でも、突然夏休みに現れた日本人を採用してくれる学校なんてあるだろうか。望みが薄いのはわかっていた。でも失う物は何もない。わずかな可能性を望みに、ピッツバーグ、オクラホマシティ、ヒューストン、サンタフェ、ラスベガス、ロサンゼルス、立ち寄った街の教育委員会のすべてに履歴書を置いてきた。と同時に、最後の思い出づくり、アメリカの旅も満喫した。

Desperate for an opportunity to stay in the US, I decided to travel around the country with a stack of resumes. I rented a car in New York and kept driving diagonally throughout the huge continent, heading west to California during the summer. I visited many state education departments during the day, while going to ballparks to watch minor league baseball games at night. I managed to meet important people at school district offices here and there on weekdays while camping in national parks on weekends.

訳：アメリカに残れるためなら、なんでもやろう、そんな思いで履歴書の束を抱えて全米を旅することにした。ニューヨークで車を借りて、広大な大陸を対角線上に進む。目指すは西のカリフォルニア。昼間は州の教育委員会を訪問し、夜はマイナーリーグの試合を見物した。平日は学区事務所の偉い人とアポを取り、週末は国立公園内でキャンプをした。

しかし、こんな中途半端な就職活動で仕事が見つかるほど、アメリカも甘くない。滞在期限が切れる9月半ば、サンディエゴから帰国することになった。車の走行距離14,000キロ、訪れた州は13州、そして接触事故1件。無謀な旅とともに、3年間のアメリカ生活が終わった。

帰国後は実家に戻り、大学の通信課程で日本の教職コースを履修しながら、塾やサポート校で教えるという生活を始めた。その年の終わりのメールを読み返すと、ブロンクスにまた行きたい。生徒たちの写真を見ていたら急に懐かしくなって、クリスマスカードを60枚も書いてしまった、あんな汚いところをなぜ恋しく思うのか、自分でも分からない、という記述がある。

エピローグ

帰国して数年たったある年の暮れ、アメリカから1通の手紙が届いた。差出人のWilma Newman（仮名）という名前には聞き覚えはなかった。同封された手紙には、“Eulogy for Janice Newman”というタイトルで、長い英語の文章が続いていた。えっと、eulogyってどういう意味だったっけ。あれ、もしや。確認のため辞書を引くと、悪い予感が的中した。「eulogy（名詞）：弔辞」

翌年の春休みにブロンクスを訪れ、差出人のWilmaを訪ねた。姉のJaniceは前年の10月のある朝、突然息を引き取ったという。苦痛を伴わない、寝たまま起きてこなかっただけの、安らかな死だったそう。一人暮らしの姉の遺品を整理していたとき私の住所を見つけ、手紙を送ってくれたのだという。

3年武者修行を続けられないだろうか。

学期末、上司に「ビザは切れてもまだアメリカにいたい」という希望を伝えたら、彼女は協力しようとしてくれました。教育委員会のお偉方をまわって、Mr. Harada にビザを出してくれと、頼んでくれたのです。弁護士にも相談したら、雇い主の教育委員会からビザが出ないとアメリカにはとどまれないということ。だから自分も動きました。移民局、教育委員会人材採用室、法務課、そして教員労働組合。しかしどこに行っても、日本人英語教師にビザを出すのは無理だという返事。



最後の授業

1年前の就職活動の苦勞に逆戻りだ。いくら Janice が協力してくれるとはいえ、雇い主の教育委員会が、面倒なことはしたくないという態度であった。就労許可の期限が切れて、アメリカから追い出される日が迫っていた。ブロンクスを離れるのはつらかったが、ここでぐずぐずしてられない。アメリカのどこでもいいから、とにかくビザを出してくれる人を探すこと。

I even visited the BOE to talk to them directly, but they all treated me like a dog, saying "Who told you to come here?" or "The BOE has nothing to do with your visa." Even after the semester ended, I did not get any help from the BOE. But my AP and I kept networking until I realized sometime in July that I should leave New York. Otherwise I would have gotten frustrated to the point where I would have started kicking some asses. What I didn't realize was how much I was going to miss the people in the Bronx.

訳：教育委員会まで出向き直接交渉に乗りだすこともあったが、ことごとく邪険に扱われた。「お前は誰の指示でここに来たんだ。」「教育委員会はあんたのビザの面倒まで見ないよ。」学年末になっても教育委員会からの助けが得られなかったが、上司も僕もさまざまな人脈を頼り続けた。しかし、7月のある日、ニューヨークを離れた方がいいという決断に至る。こんなことを続けていたら、ストレスがたまって狂いそうだった。そのときまだ気づいていなかったのは、やがてどれほどブロンクスを恋しく思うかということ。

very carefully, watching out for a blackboard eraser flying toward my head. However, as I opened it, I was surprised to find a cake on my desk. Then, I heard the kids inside the classroom cheer. They all sang.

"Happy birthday to you,
Happy birthday to you,
Happy birthday Hah-Rah-Dah
Happy birthday to you."

I couldn't bring myself to say "Call me Mister Harada," this time. All kids were looking at me, examining my face. One of the boys said "Hey mister, don't cry."

訳：一番の思い出は4月、学年末の2か月前の出来事だった。その日教室に向かう僕の前に、廊下でたむろしている生徒が見えた。いつもの問題生徒だ。僕の姿を見るなりひそひそ話を始めたので、嫌な予感がした。近づくと「教室に入るな」と通せんぼ。またよからぬ策略があるのだろう。「コラどけ、授業が始まっているのに、廊下でうろうろしているな。」と、彼らを押しのけドアに手をかけた。そして、黒板消しが僕の顔をめがけて飛んでくることを警戒しながら、そっと開ける。するとなんと、教卓にはケーキがおかれているではないか。同時に教室の中からは、生徒たちの歓声、そして合唱が始まった。

ハッピー・バースデー トゥー ユー
ハッピー・バースデー トゥー ユー
ハッピー・バースデー ハーラーダー
ハッピー・バースデー トゥー ユー

このときばかりは、「原田先生と呼べ」ということもできなかった。生徒たちが僕の反応をうかがっている。一人が口を開いた。「おい先生、泣くなよ。」



サプライズ・パーティ

授業も忘れ、初めて生徒と雑談した。「今度の連休はどこかに行くの。」
「無理よ。あたしには赤ん坊がいるんだもの。」

帰国前の悪あがき

夏休みの長いアメリカでは、6月初めに学年末を迎える。褐色の肌の生徒たちが fuck を連発しながら行きかう廊下に、どれだけ鍛えられたことであろう。金属探知機と警察官に面食らい、生徒の反乱に不登校寸前まで追い込まれていた自分であったが、今はそんな生徒たちに愛着を感じている。自分の英語力にも満足できていないし、まだまだこの町で学ぶべきことがあるような気がした。あと2、

Because he didn't have a note from his mom, I said "No, you can't leave the class without an official note." In an instant, he went nuts, screaming I had no right to prevent a student from going to the dentist. Soon his anger was conveyed to the whole class and all kids started protesting to me on his behalf. Again the class broke down into total chaos. So, I said, "Do you want me to call Ms. Lopez?" Then the kids stopped screaming and became quiet.

That was until a girl dared to exclaim, "You always say, 'Ms. Lopez this, Ms. Lopez that.' You like her, don't you?" I don't know what kind of expression there was on my face, but the kids must have seen something. They roared with laughter. I was driven into a corner to explain that Maria was just a good coworker of mine and I respected her as a teacher. But no matter what I said, they kept laughing harder and harder and things were totally out of control. They laughed hardest when I shouted, "Get serious and stop laughing. Open your books to page 78 now!"

訳：ある日、一人の生徒が、歯医者に行くので授業を早退すると言ってきた。しかし、保護者からの手紙がないので許可できないということを伝えると、いきなり騒ぎ始めた。あんたにどんな権限があって俺が歯医者に行く権利を奪うのかと。その怒りはたちまち教室中に浸透、生徒全員が一斉に抗議を始め、ハチの巣をつついたような騒ぎになった。しかし「ロペス先生に来てもらおうか」という僕の一言で、彼らはたちまち静まった。

その時である。一人の女子が「先生は、ことあるごとにロペス先生、ロペス先生っていうけど、ひょっとしてロペス先生に気があるんじゃないの。」このとき自分がそんな表情をしたのか定かではないが、クラス中がどっと笑い声をあげた。「ロペス先生は立派な先生で、同僚として尊敬しているよ。」そんな釈明をすればするほど、笑い声は高まるばかり。ついには「いい加減にしろ。さあ、授業を始めるぞ。教科書78ページを開け！」と叫んだ時、彼らの笑いも最高潮に達した。

What a Surprise.

春学期も終わりに近づき、ブロンクスでの1年も終わりに近づいてきた。そんな時、忘れもしない出来事があった。

The most memorable event came in April --two months before the end of the school year. On the way to the classroom I saw a couple of students hanging around in the hall. They were the ones who had always given me hard times. When they saw me walking, they whispered to each other, which put me on alert. As I approached them, one of them said "Mister, don't go into the classroom." I suspected that there was evil-doing going on again. "Get out of my way. You can't hang out in the hall now," I said. I pushed my way through their barrier and reached for the door. I opened it

生徒たちの作文を集めて文集を作ったこともある。タイトルは Foods We Are Proud of (自慢の料理)。各生徒が出身国の名物料理のレシピを、自分で描いた絵を交えて紹介するというもので、生徒から集めた原稿を編集して製本した。

教員部屋で一人残って様々な雑用をしている私に、Janice がよく声をかけてくれた。「日本人ってよく働くのね。他の先生も、もう少し頑張ってくれればいいのに。」こっちは、授業崩壊を避けようと必死でやっていただけだが、傍から見れば働き者に見えたのかもしれない。

Maria Lopez

ある程度職場に慣れてきたとはいえ、生徒とのコミュニケーションでは苦勞の連続だった。特に、スペイン語ができないのは大きな制約だった。生徒たちも英語が分かっているはずだが、いざとなると分からないふりをする、あるいはスペイン語で反抗してくる。一番手に負えないのは、叱られた生徒が口答えをして、それに同調した生徒たちが集団でスペイン語攻撃をしてくるとき。そんなとき、私をよく助けてくれたのは、エルサルバドル出身の Maria Lopez (仮名) という先生だった。生徒と私との間にトラブルがあると、通訳をしながら生徒指導もしてくれた。

The one thing that bothered me so much was that the kids often freaked out in Spanish and there was no way to talk to them to calm down. Luckily, I got good support from a young female teacher, Maria Lopez, who was teaching Spanish. She suggested that whenever I had problems in class with Hispanic students, I call her for help and she would talk to them in Spanish. I really appreciated her offer. She often came and talked to the class whenever any of the kids freaked out and got out of control. She came to preach, when the kids went crazy because I gave them a surprise test, when they roared with anger because I declared that I would never let anyone go to the bathroom, or when they went wild because they had to attend my class while a student fashion show was going on in the auditorium. Her sermons in Spanish to the kids were always good enough to scare them and make them behave.

訳：特に困っていたのは、スペイン語で興奮する生徒をなだめることができないこと。幸運にも、マリア・ロペスという若い女性のスペイン語の先生が助けてくれた。教室でヒスパニックの生徒とトラブルになったら、呼びに来てくれれば、あたしの方から生徒たちに話して聞かせてあげる、と申し出てくれたのだ。何とありがたい申し出か。生徒が興奮して手が付けられなくなったときは、いつでも駆けつけて説教してくれた。予告なしのテストを実施しようとして生徒が騒ぎ出したとき、授業中トイレ使用禁止令を發布して生徒が猛反発したとき、講堂で開催された生徒会ファッションショーと授業の時間が重なって、生徒たちが抗議して課題に取り組まなかったとき、いつも彼女が助けてくれた。彼女のスペイン語の説諭はかなりの効き目があるらしく、たちまち生徒はおとなしくなった。

One day, a student said he wanted to leave the class for a dental appointment.

の多いある生徒は、両親が共働きで忙しく、小さなアパートに4人兄弟と暮らしているとのこと。母親に欠時のことを伝えたら、どうすることもできないのだと泣かれてしまった。

貧困問題は深刻で、こんな話も耳にした。

(今年のニューヨークの冬は)寒かったです。マイナス15度ぐらいまで下がり、イーストリバーは凍っていました。雪もよく降りました。ハリケーンのときはちょっと風が吹いただけで休校になったのに、冬は大雪でも休校ではないのです。そしてそんな日には、あまり来て欲しくない生徒が、きちんと学校に来ます。授業中に喧嘩を始める生徒、授業妨害をやるような生徒、チャイムが鳴ってからトイレに行きたがる生徒、テストのときだけ歯がいたくなる生徒、毎日お昼を食べた後に頭が痛いから保健室に行かせてくれとわめく生徒、そういう生徒が熱心に学校にくるのです。そういう子の家庭環境は大概劣悪だけど、学校に来れば昼食はあるし暖房もあるから、まじめに登校する、またそういう子供のために、ニューヨーク教育委員会は市内の学校を開けておくんだ、と同僚の先生が教えてくれました。

春休みには、多くの生徒の出身地である、プエルトリコで数日を過ごした。カリブ海に浮かぶ南国の楽園、のんびりした土地柄に、そこに暮らす人々も穏やかだった。こんな土地から来た生徒たちが、どうしてニューヨークで荒れてしまうのか。熱帯の国からニューヨークの寒空の下に移り住み、ゲットーのような街で暮らしている生徒たち。やはり、生来の性格というより、環境の影響が大きいに違いない。

子どもが環境で変わるなら、教師にもできることがあるのではないか。しかし、スペイン語ができない日本人。アメリカ暮らしが長く英語が流暢な生徒とは罵り合いになりがちだ。唯一可能なまともなコミュニケーションは、英語の経験は少なくとも意欲のある生徒が提出する毎日の宿題と、それに私が入れるコメントだった。読み物の感想を書け、過去形を使って日記を書け、といった課題を毎日丁寧にこなしてくる。だから、それに対するフィードバックはかなり丁寧に行った。

ただ私を悩ませるのはきちんとやるべきことをやってもできない子、宿題をやってもテストの点数が悪くて不合格になる子です。こういう子には申し訳ないという気持ちがありました。そこで2学期目から始めたのは、宿題をやっても間違えているものは再提出をさせるというものでした。生徒たちからは不満の大合唱だし、こちらも倍の量の宿題を見るので二倍の労働量でした。同僚の先生は、僕が職員室で宿題のチェックをしていると、「宿題なんていちいち見ないでいいのよ。」なんておせっかいを焼いてきます。そんな同僚の目を避けるため、空の教室で仕事をしたこともしばしばありました。

でもこの厳しさがある程度効を奏したのか、二学期目はもっとまともな授業ができました。こちらの苦勞をちゃんと分かっている子は分かっている、バレンタインにはプレゼントをくれるような子もいたのです。

しかし、1学期間ブロンクスで過ごすことで、私の生徒との接し方が変わってきた。教員とは無力なもの、その事実を受け入れ、自分が変わろうとしたのであろう。

Powerless, I have no choice but to let students win. When a restless boy goes out to the hall during my class, I have to beg him politely, "Could you please come back to the classroom, sir?" When a girl says to me "Get the fuck out of my face," I get the fuck out of her face. When another girl says to me "Stop giving me shit!" I stop giving her the shit.

訳：所詮は生徒には逆らえない無力な教師、彼らに負けを認めるしかない。落ち着きのない生徒が廊下で騒ぎまわれば、「お願いですから、教室にお戻りください」と頭を下げる。女子生徒に「あたしに汚いツラを近づけるんじゃないわよ」と言われれば、「汚いツラを近づけない」ことにする。「金魚のクソみたいにつきまとわないでよ」と言われれば、「金魚のクソみたいにつきまとう」のをやめる。

新学期クラス替えが行われ、文法のクラスでは1段上のクラスを担当させてもらうことになった。前学期と同じ顔触れの生徒も多かったが、前学期散々苦しめられた生徒は進級していないので、別れることができたのである。そんなこともあって自分の心にも若干の余裕が生まれ、それがわずかながら生徒理解にもつながった。そこから浮かび上がるのは、複雑な家庭環境、思春期に祖国を離れなければならなかった運命を嘆く姿、そして貧しい生活環境。連日の授業崩壊で被害者意識ばかりが強かったのだが、生徒たちもまた、被害者なのかもしれない。

In the second semester, I was beginning to see the students' backgrounds. One girl, who was always sucking her thumb, had been abandoned by her parents and was living with a foster family. A boy from Venezuela was not happy living in the US. He wanted his mother to send him back home. So he misbehaved at school, trying to send her a message that he was a misfit. There was another student who kept doing his homework incorrectly every day. I found out he did not go to school in his home country. I discovered he was almost illiterate in Spanish as well as in English. I learned that another boy who had cut classes many times lived with his four brothers and sisters in a small apartment while his parents worked every day. When I called his mother to tell her about his habit of cutting classes, she cried, saying that she was powerless to do anything.

訳：2学期目に入って、生徒たちの姿が見えてくるようになった。いつも親指をしゃぶっている女子生徒、両親から見放され里親と暮らしているらしい。ベネズエラから来たある男子生徒は、アメリカ暮らしになじめず、いつも帰りたいと親に訴えているそうだ。彼が学校でいろいろ問題を起こすのは、どうやら自分の不適應ぶりを親に見せつけて、ベネズエラに送り返してもらうための手段なのかもしれない。宿題をきちんとやっても同じ英語の間違えが直らない生徒は、自分の国でもまともに学校に通ったことがないようで、英語だけでなく、スペイン語でも読み書きができないことが分かった。無断欠席

本当にむかついたから、あの母ちゃんの母ちゃんに電話してやろうかと思ったよ。)

秋学期が終わり

年が明け、西暦2000年を迎えた。アメリカでは、早々と1月2日から学校が始まる。ニューヨークは2学期制、1月半ばに秋学期が終わった。前期の文法のクラスでは、34名中25名が単位を落とすありさまだったが、落とされた生徒たちの不満は、私にぶつけられた。

最初の学期は半分以上が不合格になり、単位を取れませんでした。授業を聞かないし、宿題をやらないのだから当たり前です。おまけにクリスマスにドミニカ共和国に帰省して、そのまま1か月も学校に帰ってこない子もいました。そんな子に限って、教師のせいにしてわめくのだからたまりません。「何で俺が55点なんだ、」と、今にも殴りかかりそうな勢いで迫ってくるので、計算式を書いて説明したのですが、英語も算数もできない子には通じません。

During class one day, I heard someone knock on the door. When I opened it, I saw a girl who had failed my class holding her report card. She had come to the United States a year before and had hardly learned any English. But it seemed that she decided to taunt me in English.

"Harada! Harada!" she yelled.

"Call me Mister Harada." I replied.

"Harada! Harada! You bad!", she continued shoving her report card toward my nose.

"Well, that's the score you earned." I said bluntly.

"Harada! Harada! You bad! You bad! You bad!" She went on and on.

"No, You ARE bad," I tried to correct her English.

"No, YOU!" she yelled at me and ran, not at all getting what I meant.

訳：ある日の授業中、教室のドアをノックする音が聞こえた。開けてみると前学期の僕のクラスで「不可」を取った女子生徒が、通知書を持って立っていた。一年前にアメリカに来たばかりで英語がほとんどできない生徒だったが、この日ばかりは、俺に英語で談判をしに来たようだ。

「Harada, Harada!」とわめくので、

「Mr. Harada だ」と、こちらもやり返す。

「Harada, Harada, You bad!」と、通知表を俺の顔に突き付けてくれば、

「そうだ、それがお前の成績だ」と、俺もぶっきらぼうに答える。

「Harada, Harada, you bad, you bad!」と、なおも続けてくるので、

「You ARE Bad だろ」と正しい英語を教えようとするれば、

「No, YOU!」と言い残して、走り去ってしまった。

まったく会話にならない。

悪ガキ対処法

生徒を制圧する力がほしかった。しかし生徒に触ることも許されないのが現状。問題生徒にできることといえば、警察官や生徒指導担当教師 (dean) を呼んで教室からつまみ出してもらうこと。Janice は、困ったことがあったらいつでも助けるつもりだと言ってくれた。もう一つの手段は、問題生徒の親に電話すること。英語が話せない保護者と連絡を取るために、Basic Spanish for Teachers という本まで買って、必要な表現を丸暗記した。「あなたの息子さんは授業中の私語をやめません」は「ス・イホ・アブラ・ムチョ・エン・クラセ」、「お宅の娘さんは教師をバカにしているようです」は「ス・イハ・ノン・ティエネ・レスペト・ア・ス・マエストロ」などなど。しかし、いずれの手段も焼け石に水で、自分の不満は学校や保護者にまで向けられる。

There are two ways to deal with such kids. One is to send them to the dean's office. I do it almost every day. But the deans are no help. They just have a ten-minute talk with the kids to tell them to behave and return them to my class. Of course, they misbehave again. What do the deans think they can do with a ten-minute talk? I've been telling them to behave more than two months!

The other way is to call their parents. This is not very effective, either. First, many of the parents don't speak English. When I try to explain the situations in Spanish, they are just amused with my broken Spanish and laugh. Second, even if they understand what I say and make their children behave, their good behavior won't last more than two days. Third, some parents don't care about their kids at all. One mother even told me she didn't want to talk because she was sleepy. Who in the hell could be sleepy when she got a phone call from her misbehaving son's teacher? Besides, it was already 11 o'clock in the morning when I called. (At that time I was so pissed that I thought about calling the mother's mother.)

訳：奴らの対処法は2通り。一つは、生徒指導室に送りつけること。ほとんど毎日のようにやっている。ところがあの人たちも薄情だ。10分くらい説教して「おとなしくしてなさい」と注意しただけで、また教室に戻してしまうのだ。そんな注意じゃ効き目ないよ。大体10分足らずの指導で何ができているんだ。こっちは2か月以上も指導しているんだぜ。

もう一つの方法は、奴らの親に電話すること。これもあまり効果がない。そもそも親が英語を話せない。こっちがなんとかスペイン語で説明しようとする、おかしらしく笑い始めるんだ。それに仮に話通じて、親が注意してくれたとしても、奴らの真面目な態度なんて2日以上も続かない。それに、子どものことなんかちっともお構いなしという親だっているんだ。こないだ電話した親なんか、「今は眠いから電話なんかしないでくれ」だど。子どもが問題を起こして学校から電話がかかってきているのに、「眠いから勘弁」なんて親がどこにいる。それに俺が電話したのは朝の11時だけ。(あの時は

学だった。しかし当時を振り返り、こんな考えが頭をよぎる。「あのとき、もう少し強く止めてくれればよかったのに。」

このような自分であったが、日本の友人たちには弱みを見せたくなかった。偉そうなことを宣言して渡米した自分である。プライドだけは高かったと見えて、当時の日本語メールには、こんな強がりを読み取れる。

先生が生徒に手を上げない分、生徒も先生に手を出すということはほとんどありません。いまでもよく自分よりでかい生徒と教室内や廊下でにらみ合いを演じるんですが、不思議と恐怖を感じないのもこのためかもしれません。

さらには、弱気の自分を出す代わりに、闘う自分の姿を伝えようともしていた。英雄になりたかったのだろうか。

授業中の私語、休み時間の喧嘩、ここまではしょうがないでしょう。黒板に板書していたら生徒たちがゴミを投げて遊びまわっているのには我慢ができません。そのゴミの一部は私の背中にもぶつかってきます。そして振り向いて誰がやったのか聞けば皆で声をそろえて「知らない。」本当に腹が立ちます。

(中略)

さらにかわいくないことに、やつらは嘘をつくのです。悪さをしたやつを問い詰めても問い詰めても、必ず "I didn't do it" とくるのです。もちろんこちらも毎日チョークをぶつけられれば誰がやっているのか見当ぐらいつきます。でもやつらの返事は決まって "I didn't do it." 首をしめたくなくなりますよ。

このような強がりとは裏腹に、内心は教師としての情熱を失う毎日であった。そしていつの日か、教えることが嫌いになり、生徒たちを憎むようになっていった。そして、自分が大学院で叩き込まれた「自律学習」、「生徒中心の授業」といった教育思想にすら反発を感じていた。生徒の自律？そんな性善説はここでは通用しない。学者さんたちは現実を知らないのではないだろうか。

私もこの仕事を始める前までは信じていました。どんな悪い生徒でも心は純粹、情熱をもってぶつかれば心の交流ができるはずだ、なんて。でも（連日でごみをぶつけられた）このときは、「こいつらは根まで腐った人間のクズだ」と思ってしまいました。

Despite my initial passion for education, I am becoming less idealistic. However, I think I can still enjoy teaching if I think this whole thing is a game. Every day on the subway to work, I think about how I can retaliate against those bad kids.

訳：当初の教育への情熱とは裏腹に、理想を失いつつある。でも、すべてはゲームだと割り切って楽しむようにしている。どうしたら彼らを懲らしめられるか、朝の通勤の地下鉄内であれこれ考えている。

実際自分も、喧嘩に巻き込まれて目にけがをしたことがある。大したことはなかったのだが、学校の勧めに従って眼科医で診察を受けることになった。検査の結果、「まぶたのかすり傷で眼球に異常なし」ということだったが、診察代185ドルを払う羽目になってしまった。教育委員会に請求したが手続きに時間がかかり、結局のところ支払を受け取ることなく、1年後に退職という結果になった。

授業をそっちのけで黒板のまん前で口論をしている男子と女子がいました。スペイン語なので何を言っているのかさっぱり分かりませんが、こっちだって授業を始めなければなりません。しかし着席を命じても、全然いうことを聞きません。腹が立ったから、彼らに近づき、「おいコラ、座れて言っているんだよ、分かんねえのか!」と、至近距離から怒鳴りつけてやったのです。すると彼らは私の言うことを聞く代わりに、いきなり殴りあい始めたのです。男と女がですよ。「座れて言っているんだろ!」と叫ぶ私を無視し、彼らは殴り合いを続けました。何せ生徒に触るなどいわれているんだから、やめると叫ぶ以外になす術なしです。そんなことが1分ぐらい続いたでしょうか。そこによくやくおまわりさんが、騒ぎを聞いて駆けつけてきました。そして喧嘩をしていた二人を外に引きずり出したあと、僕の顔を見て言いました。「先生、目がはれているよ。」僕の顔を見た生徒たちも大喜び。どうやら、喧嘩をしていた2人の腕が僕の顔にかすったみたいです。その日は医務室から眼科に送られ、多額な診察代を払うことになってしまいました。

(中略)

翌日学校に行ったら、いつのまにか職員食堂の人気者になっていました。「喧嘩止めようとしてけがしたんだって? さすがだね。」「俺のクラスに手に負えないのが二人いるから、先生、今度よろしく頼むわ。」「明日から学校にニンジャ・スターズ(おそらく手裏剣のことでしょう)を持ってきなよ。ガハハハハ。」

不登校の危機

この一件をきっかけに、私は教員の間で受け入れられてきたようである。しかし、生徒との関係は最悪であった。授業は相変わらずの崩壊状態で、教師としての自信を失いつつあった。生徒はことあるごとに反発した。注意をしても、怒鳴りつけても改善するわけではなく、着席を拒む生徒を座らせようとすれば Don't touch me と手を払いのける、テープを流してリスニングをやらそうとすれば大声で妨害し、板書すれば後ろからものが飛んできた。むろん協力的な生徒もいるにはいたが、授業の大半は問題生徒との怒鳴りあい。彼らが私を見る目は、敵意に満ちていた。そして42分の授業が終われば、大テーブルでため息をつく日々だった。

授業の進まない毎日に疲れ果てるだけでなく、反抗する生徒に囲まれて、自分が孤立しているように思えた。いわば、「いじめられ教師」。今日ではどんな悪態をつかれるのか、そんなことを考えると、教室に向かうのもつらくなってきた。とりわけ月曜の朝は重苦しい気分、アパートの窓から差し込む朝日が恨めしく、不登校生徒の気持ちがあったような気がした。

思えばその2年前、留学を決意して東京の会社を退職するときは、「アメリカで暮らすなんて大変だぞ」と止めてくれる上司もいた。それでも、日本の英語教育を変えるんだ、と大見得を切ったの留

These kids are so rude. They call me Chino. (Who is their Geography teacher?) They say things like, "Hey Chino, you stink! Did you take a shower? Don't come close to me. I will throw up."

(中略)

The kids are happy to see me get angry. They do everything to enrage me. When I am teaching, kids not belonging to my class yell at me from the hall "Hey, what's up Chino?" If I ignore them, they start banging on the door until I come out.

訳：この連中の生意気なこと。俺のことを「チノ」なんて呼びやがる（一体誰に地理を習っているんだ）。こないだなんか、「おいチノ、お前臭うぞ。今朝シャワー浴びたのか。気持ち悪いからこっちに来るなよ。」だと。

連中は、俺が怒るのが楽しいようだ。怒らすためなら何でもしてくる。こないだも授業中によそのクラスのパカが、廊下から教室の中に向かって「おいチノ、元気か」と叫んでいた。こっちが無視すると、俺が出てくることを期待してドアをドンドン叩くんだ。

生徒がけんかを始めたら

生徒の体に触れられないということは、生徒同士の喧嘩を止めることも禁止。授業中に喧嘩が起きれば、信頼できる生徒に廊下の警察官を呼びにいかせ、その間教員は殴り合いの様子をしっかりと観察していること、そしていざとなれば教育委員会に報告できるように。そのようなニューヨークのルールを知らず、トラブルに巻き込まれたことがある。

出勤三日目にして早くも大喧嘩に遭遇しました。教科準備室で指導計画を作っていたら、すぐ前の教室で叫び声とガチャングチャンという音。駆けつけてみたら女の子二人が取っ組み合っているではありませんか。それもなだめようとした年寄りの先生を押しつぶすようにして。なんだ女の子か、と油断して片手で止めようとしたのが大間違い。そのまま二メートルぐらい引きずられました。こりゃ大変だと、一生懸命綱引きをやっていたら、後から入ってきた教頭が、僕の腕を引っ張り、信じられないことを言ったのです。「やらせておきなさい。警官に任せておけばいいんです。」自分の耳を疑いましたよ。その後、取っ組み合っていた二人は駆けつけてきた婦警さんを軽く突き飛ばし、結局は四人の男のおまわりさんに押さえつけられました。最後は手錠をかけられ、大声でわめきながら地下の生徒指導室に消えていったのです。

それより驚かされたのは、ほかの先生たちの反応です。喧嘩を止めようとした私を皆で責めるのです。「何であんな無茶をしたの？けがでもしたらどうするの？」という批判なら分かりますが、「あなたは独身でしょう。女子の体にあんなふうに触ると、セクハラで訴えられるわよ。」という批判には理解に苦しみました。おまわりさんだって突き飛ばされるような大喧嘩だったというのに、この人たちは何をトンチンカンなことを言っているのでしょうか？あとで教頭が事細かに説明してくれたのですが、前の校長先生は喧嘩の仲裁に入って大けがをしたのに、何の手当ても出ないという悲惨な目にあったそうです。

アメリカは訴訟社会、些細なことで生徒の保護者から訴えられるかもしれない。このため、教育委員会からのお達しは、「生徒の体に触れぬこと」。ここまで自由を奪われれば、教師は無力と化す。生徒もそのことを知っているようで、やりたい放題であった。

All they are thinking about is how to get out of school. They cannot sit still in my double-period class. They run around and scream. They sometimes have fights in class. The security guards come to my class on a regular basis. Even though these students cannot read and write in English, they already know how to argue with a teacher. One girl told me to shut up when I told her to stop making noise. Another boy said, "You're fucked up" when I told him to be quiet. I told him I would never allow him to attend my class until his mother comes to school. He is now happy fooling around in the hall every day.

訳：奴らときたら、いかに学校をさぼるか、そんなことしか頭にない。2コマ続きのクラスになれば、おとなしく座ってられない。警察官は定期的に教室をのぞきに来る。読み書きもできないくせに、先生にたてつくことはできるみたいだ。ある女子生徒に音を立てるなどといえば、「Shut up」と言われた。別の男子生徒に静かにしろと言えば、「くたばれ先公」と言われた。俺が、「今度お母さんと一緒に学校に来るまで、授業に出なくていいぞ」と言ったのをいいことに、奴は毎日廊下で嬉しそうにはしゃぎまわっている。

チノ



学校の前の通り

ブロンクスが目抜き通りだけに、ラテン系の人々で賑わう。

写真 <http://blog.tstc.org>

ヒスパニックの高校生にとってアジア人は珍しいらしく、廊下を歩けば生徒たちがもの珍しそうに笑って、大声で「ヘイ、チノ」と声をかけてくる。「チノ」とはスペイン語で「中国人」のことである。就職活動中、教育委員会の役人に中国人と間違えられたことを腹に据えかねていたのだが、生徒にまで「チノ」と呼ばれるのは我慢ならない。「先生に向かってチノとは何だ。そもそも俺は中国人じゃないし、名前があるんだぞ！」と一喝したのだが、これが大失敗。彼らを喜ばしてしまい、挑発するきっかけを与えてしまった。

らしに関しては、私なんかよりはるかに先輩。それなのになぜか、ESLの初級クラスに入ってくる。Janiceにあれほど英語がうまい生徒がどうして初級クラスにいるのか尋ねたら、「あの子たちは英語が話せても、書けないのよ。」と、彼らの作文を見せてくれた。見ると school は eskul と綴っている、過去形の ed は使っていない、さらに What do you like? は What you like?, I don't have it は No have などなど、日本の中学1年生が習う文法もままならない有様であった。

とはいえ、アメリカ暮らし10年以上の生徒たちが、私のような日本人に英語を習うのは屈辱であつたらう。シラバス通りに、アルファベットの大文字と小文字の書き方、Sunday, Monday などの語彙を授業で扱えば、不満たらたらで、ノートを開こうともしない。それどころか始業時の着席すら拒み、教室、廊下を自由自在に動き回り、座るように指示すれば悪態をつく。アメリカに渡ってきて間もないおとなしい生徒をしり目に、彼らは好き勝手な振る舞いをした。



授業風景

アメリカの教員の間では、Don't smile before Christmas という格言がある。教師にとって大切なのは規律を確立すること、だから9月の新学期には厳格な雰囲気ですべての授業を始めるべし、楽しい授業なんていうものを演出してもいいのは12月のクリスマス以降になってから、というわけだ。反抗的な生徒を前に、私も必死になった。何とか授業の規律を回復しなければ、ここでなめられてはいけない、と。しかし、反抗期の子もたちに、経験の浅い教師が無理に厳しく接しようすれば、状況は悪くなるばかり。

教室はまさに戦場。課題を与えてもまじめに取り組むのは本当に少数です。ほとんどは教室を駆け回ったり、取っ組み合ったり、大騒ぎです。こちらも部屋中を駆け回り、やつらを叱り続けなければなりません。「ラモン、授業中だろ座れっ!」「ペドロ後ろを向いていたら勉強できないだろっ」「ミゲル、そのポケモンカードとドラゴンボールカードは授業に関係あるのか。今度見つけたら取り上げるぞ。」「マリア、その“妊婦のための手引き”はカバンにしまって休み時間に読め。」「誰が黒板に俺の似顔絵を描けっていったんだ。授業中だぞ、座れ!」次から次へとあつちの生徒、こつちの生徒と、休む間もなく走り回っているのですから、まさにゲームセンターの「もぐらたたき」です。こうして走り回っている間も、やつらは攻撃の手を緩めません。「先生、トイレ行ってきていい?」「先生、水飲みたい。」「腹減った。」「うるせえんだ、オメーラは!そんなにションベンしたけりゃ、明日からバケツ持って来い。」1コマの授業が終われば、もうヘトヘトです。こんなわけで私の声は2週間でかれてしまいました。

教員部屋の大テーブルで、もらったばかりの教科書を眺めていると、チャイムが鳴り、授業を終えた先生たちが入ってくる。新入りの私の顔をみれば、Hi と軽くあいさつをして出ていく。赴任したばかりの新人教師を珍しがらないところを見ると、やはりこの学校ではすぐに辞める先生が多く、教員の入れ替えが激しいのだろうか。また、イライラした状態で入ってきて、I can't stand that boy (あの生徒だけは勘弁してほしいわ) と、教科書をテーブルにたたきつける先生もいた。



同僚の先生

多国籍な職場。外国語を教える先生はネイティブよりもノン・ネイティブの方がいいという Janice の方針。

私の教室デビューは、赴任2日目。教室に向かう前に、先輩の先生たちがいろいろアドバイスをしてくれた。「生徒が授業中にトイレに行きたいと言っても、絶対に行かせちゃだめよ。」「自己紹介で自分が新人教師だと言うと生徒からなめられるから、10年くらいここで教えているふりをしなさいよ。」

授業の最初の数日間は、心地よいものだった。クラスにはアメリカに来たばかりという、内気そうなメキシコ人の女子生徒一人。スペイン語を話せる職員に通訳してもらおうと、夏にニューヨークに渡って来たが、9月の新学期になっても学校に通わず、しばらく自宅で過ごしていたようだ。おそらくこの子のメキシコ人の両親は、娘の入学手続きの仕方が分からなかったのであろう。さっそく1対1で、What is your name? My name is Jun などと、自己紹介の練習をした。英語を全く知らないおとなしい生徒が、自分の発音をまねて練習することに幸福を感じた。2年前にアメリカに渡ってきた日本人の自分が、ニューヨークで英語を教えている、ここまで来るのにどれだけ長い道のりであったことか。ごちない授業ではあるが、アメリカで自分が役に立っている、この国で自立して暮らしていけそうだ、こんな自信にもつながっていった。

いきなり試練の場

しかし、そんな幸せも長く続かない。数日後には、ガラの悪そうな男子生徒が、「俺もこのクラスだ」と教室に入ってきた。彼の提示するプログラムカードを見ると、確かにこのクラスの生徒ということになっている。そして着席するなり、「I don't know why they put me in this dumb class!」(何で俺がこんなクラスに入らなけりゃいけないんだよ!) と、不機嫌そうに叫んだ。その英語の発音はほぼ完璧。私はすごく不安になった。こいつ、俺より英語うまいぞ。

翌日、翌々日と、「俺もこのクラス」、「私もこのクラス」、とヒスパニック系の生徒が次々と登場、1名でスタートしたクラスが、たちまち34名で満員になった。そして、そんな生徒の多くが流暢な英語を話していた。ある者は9歳から、ある者は2歳からアメリカにいるのだという。アメリカ暮

見れば廊下にも警察官がいて、生徒たちを教室の中に入れようと奮闘していた。

First, I was surprised by the metal detectors at the main entrance and the number of policemen in the hall. Then, I saw so many rough kids walking down the hall saying “fuck,” “bitch,” or “shit” It seemed as if they could not walk down the hall without using four-letter words.

訳：まず驚いたのが、入口の金属探知機と廊下にいる警官の数。そして廊下ではガラの悪そうな生徒たちが、クソだ、ゲロだと言いながら歩いていた。こいつらは、卑猥な言葉の口にしなければ廊下を歩けないのだろうか。

少し前の自分なら、この荒廃ぶりに怖気づいていたかもしれない。しかしその時の自分は、この荒廃ぶりこそ仕事を得る絶好のチャンスだと感じたのだ。「こんな荒れた学校なら必ず辞める先生がいる。その後釜として自分が雇われればいい。」小心者の自分も、4か月を超える失業状態で、かなりせっぱつまっていたのだろう。

Janice Newman との面接の細かい内容は覚えていないが、3日以内に返事をすると言われたのにしばらく音沙汰もなく、非常に苛立ったのを覚えている。そして1週間後に公衆電話からボイスメールにアクセスすると、ようやく Janice のメッセージがあり、その中に I'd like to offer you a position (ぜひともうちに来ていただきたい) という言葉を聞き取り、街頭で歓喜の叫びをあげたのも覚えている。さらには近くにいたアメリカ人に受話器を渡して、「この人、offer you a position って言っているよね、僕の聞き違いじゃないよね。」と確認したことも。

世の中、拾う神っているんですね。9月の終わりにブロンクスの高校から連絡がありましたよ、来月からここで教えてくれて。50枚近く履歴書を送りまくって、そのうちのひとつが当たったみたいです。うれしかったですよ。早速、推薦状を書いてくれた教授たちに報告とお礼を言いに行きました。「先生が書いてくださった推薦状のおかげでブロンクスの Lincoln 高校から誘いがありましたよ。」今までいろいろ励ましてくれた教授達です。てっきりいっしょに喜んでくれるのかと思ったらどうも反応が鈍い。「え、あの高校？大丈夫？」何のこともよく分からなかったけど、失業の苦勞に比べれば今後の苦勞なんてなんでもないさ、とっていたのです。

校長宛に「生徒と肉体関係を持ちません」という誓約書を提出し、10月1日から1日5時間（1コマ42分）の授業を持つことになった。Language Department というのが私の所属先で、部屋の中には大テーブル2つとロッカーがあった。英語を移民の生徒に教える English as a Second Language (ESL) の先生と、スペイン語やフランス語をアメリカ人生徒の教養のため、または移民の生徒の母国語力維持のために教える Foreign Language の先生が所属していて、Janice という人はそこを統括する Assistant Principal (AP)、日本でいえば教頭みたいな役職であった。初日は彼女が笑顔で迎えてくれ、まあ今日はゆっくりと学校の様子でも観察してと、いろいろ案内をしてくれた。学校を探索する中、地下に託児室があったのには驚いた。10代で妊娠し出産する生徒が多く、そんな生徒が授業中に赤ん坊を預ける施設だという。

しまう。教育委員会の人事採用室が、私の成績証明書にケチをつけたのだ。自分の大学院での専門は英語教授法だったので、取得した単位のほとんどが英語関係で、日本語関係の単位は1年前の夏に取得した「日本語教授法」の3単位だけだった。日本語教師として雇うのには日本語の単位が不足している、専門が英語ならば英語の分野で教職を探せとのこと。この決定で、就職の夢が一気に遠のいてしまった。日本人がアメリカで英語を教える、それは無理な話ではないだろうか。

The members of the Board of Ed were absolute idiots! Who in their right mind would hire a foreigner with no permanent residence status to teach English?

訳：教育委員会の連中は頭がイカれているとしか言いようがない。誰が英語の授業を任せるために、わざわざ永住権もない外国人を雇うんだ？

こうして9月になり新学期が始まったにもかかわらず、失業中の自分がいた。毎日のように学区事務所を訪れて、役人に相手にしてもらい順番を待つ、そんな日が続いた。どこでもいいから仕事が欲しい。「あきらめるなよ。ブロンクスなら新学期に入って3日で辞める先生がいるから、まだ雇われるチャンスがあるはずだよ。」こんな情報を得て、ブロンクスの高校すべてに履歴書を郵送するという手段に出た。50通近くの封筒の束を見てルームメイトも感心、というより呆れていた。

September came and the new semester started, but I was still jobless. I had never felt so hopeless. I was determined to take any job no matter how difficult it was. Somebody told me that there was a severe teacher shortage in the Bronx. In fact, very few people had the guts to take a job in the Bronx because of its rough neighborhoods. Since I was even willing to teach in a juvenile detention center, I sent my resumes to all high schools in the Bronx.

訳：9月になったというのに、僕はまだ失業中。このときほど行き詰まりを感じたことはない。どんな大変な仕事でも引き受ける覚悟であった。ブロンクスならいつでも教員が足りないはずだと、だれかが教えてくれた。あんなに荒れた地域でわざわざ就職する物好きも少ないのだとか。僕は教職につけるのなら、そこが少年院だってかまわないと思っていたくらいだ。すぐにブロンクス中の高校に履歴書を送ることにした。

ようやく就職したその先は

そんなブロンクスの高校の1つ、George Lincoln High School (仮名) というところから電話があったのは、9月の半ば過ぎ。当時は、就職先がどこでも対応できるようにアパートは週契約、部屋には電話も引かず、月20ドルで契約したボイスメールのアカウントに公衆電話からアクセスするのが、唯一の通信手段だった。そこに入っていたのは Janice Newman (仮名) という女性の声で、あなたの履歴書を拝見した、とりあえず電話をしてくれ、夜になったら自宅でもいいと、電話番号まで残してくれた。久しぶりのチャンスである。

数日後、電話で約束した時間に学校に行ってみて驚いた。入り口には金属探知機と警察官が配置され、生徒がそこをってから校内入る。ひとたび校舎内に入れば、廊下はすさまじい喧噪状態であった。

ころと言えば、そう、ここニューヨーク。日本語の授業を開講する学校も増えているし、日本人教師の需要は必ずあるはずだった。

しかし、日本語教師の職も簡単に手に入るものではなかった。ニューヨーク教育委員会に出向き、日本語プログラムがある学校の一覧を手に入れて、片端から電話をしてみたものの、ほとんどが新規採用の予定はないという答え。たまたま採用を考えていて私に興味を持ってくれる校長にも出会えたが、私の就労許可の期間が1年だけだと分かったと、そこで行き詰ってしまった。

こちらは教員免許が法律上取得できない外国人。公立学校でプロとして教えるのは容易なことではありません。教員が足りない分野では無免許の先生でも校長先生から指名を受ければ教壇に立てるのですが、現実には想像以上に厳しかったです。ニューヨークの学校をいくつも回ったのですが、どこへいってもグリーンカード（アメリカ移住権）がないのなら雇えないとのこと。雇う側にてみれば、1年しか働けないような外国人よりも永住権をもった人に教えてもらいたいというのは、無理からぬ話です。そんなわけで、就職活動は困難を極めました。

1週間地下鉄乗り放題のパスを買って、市内の学校や学区事務所を訪問した。自分の履歴書には多少の自信を持ってはいたものの、職が決まらないまま8月を迎えた時はかなり焦った。新学期が始まる9月までには何とかしなければ、そんな思いを胸に学校訪問を続けているうちに、ニューヨークの地下鉄路線の大半を制覇した。地下鉄も市街地から離れれば地上に出るが、治安の悪いと言われる地域に入れば、窓からは荒廃した建物や、塀の落書きが目に入る。以前の自分なら、ここで怖気づいていたかもしれないが、「治安の悪い地域は教師不足が深刻だから、その分雇用の機会が多いはずだ」という友人からの情報に励まされた。卒業した学校の図書館がバイトで雇ってくれ、そこでもらえる時給8ドルが唯一の収入源であった。



地下鉄の長いトンネルを抜けると、そこはプロンクスであった。

(写真 <http://glanceback-bxblues.blog>)

ようやくこの長いトンネルから抜け出せそうに見えたのが、就職活動開始から3か月たった8月半ば。ハーレムの進学校から、1年間でもいいので日本語教師として来てくれないかという、オファーをもらった。面接の末、教育委員会に提出する任命書をもったのだが、これも行政の壁に阻まれて

程最終学期に行ったブルックリンの中学校での教育実習であった。当時のメールには以下のような記述がある。

卒業前の学期にはブルックリンの公立中学で実習をやりました。周りからニューヨークの公立学校のひどさについていろいろ脅されたのですが、それとは裏腹にとっても楽しい実習でした。生徒はヒスパニックのほかにも中国、アラブ、ロシア系など多様性があり、日本では到底体験できないような環境で教えられたのは本当に幸運でした。(中略)(その生徒たちは)みんなかわいかったですね。音楽とか使って教えたら喜んでついてきて、廊下で会っても遠くから“Hi, Mr. Harada!”なんて声をかけてくれたりして、私によくついていました。(中略) 最終日には手製のカードをくれたりして思わずウルウルしてしまいました。

アメリカ残留を希望したもう一つの理由に、自分の英語力に対する不満がある。2年暮らした後でさえ、自分の英語の拙さに苛立ちを覚える毎日であった。この英語力ではまだ日本に帰れないという思いがあった。幸い米国には、**Practical Training** といって、学位を取った留学生に1年間就労を認める制度があり、これを利用して何とか英語力を高めたいと考えていたわけである。そもそも今回の留学も、長年の夢がかなったもので、一度帰国してしまったら今度はいつ来られるのかもわからない、せっかく来たのだからこの機会を最大限利用しなければ損だ、という思いもあった。

4か月の失業体験

アメリカは移民を受け入れてきた国ではあるが、永住権のない外国人にとって、就労の門は狭い。しかし、典型的なアメリカ文化を経験するには、自分が教育実習をしたような公立校がいいと考えていた。ニューヨークの高校には日本語を教えるプログラムもあるらしい。友人から聞いた話だが、あえて日本語を選択する高校生は、語学好きの意欲的な生徒が多いということ。日本人の自分には最適な就職先だと思えた。当時の英文メールでは、そのあたりの事情をこう記している。

The only problem at this point was to find out where I could get a job teaching kids? In Japan? Maybe. But the number of kids is going down and getting a job at a school is extremely difficult. Besides, I'm not certified to teach in Japan. In California? That's a good alternative because there is a large Japanese population. But it is not a place for people who don't drive, like me. There is only one place in the U.S. where people can live without driving. Yes, it is here in New York. There are a growing number of public schools in New York starting to teach Japanese to American kids, and I knew they needed more Japanese teachers.

訳：問題はどこで教職に就くかだ。日本も悪くはないが子供の数が減っているから、教職に就くのはかなり難しい。それに僕は日本の教員免許を持っていないし。カリフォルニアはどうか？日本人の人口も多いのでいい選択肢かもしれないけど、僕みたいに車の運転ができない人間には暮らしぶらいところだね。アメリカで唯一車なしで暮らせると

けた建物を多く目にする (www.newyorkoggi.com)。



(地図：www.at-newyork.com) ブロンクス全図

US Census Bureau (米国国勢調査局) のデータによれば、この地域におけるヒスパニック系住人の割合は53.8%、英語以外の言語を話す人の割合は56.3%だという。一人あたりの年収は約18千ドルで、ニューヨーク州全体の水準32千ドルと比べると著しく低く、28.5%が貧困層だとされる。また教育水準でも遅れが目立ち、25歳以上の人口に対する高卒以上の割合は69.2% (州全体では84.6%) に過ぎない (<http://census.gov>)。今日でも治安の悪い地域とされ、暴力を伴う犯罪率は約11件/1000人 (全米では3.9件/1000人) となっている (www.neighbourhoodscout.com)。ニューヨークの旅行ガイドも、この地域は危険なのでむやみにうろつかないようにと呼びかけている (例：ダイヤモンド社「地球の歩き方：ニューヨーク 2012-2013」)。

アメリカで就職



(写真 <http://www.bceq.org>) ブロンクスの風景

5年間勤めた企業を辞めてニューヨークの大学院に留学を決意した当初は、アメリカに住むのも修士課程に在籍する2年間だけと考えていた。では、何故アメリカでの就職を考えるようになったのか。主な理由として、アメリカの学校のとりこになってしまったことがあげられる。きっかけは、修士課

ブロンクス奮闘記

英語科 原田 淳

はじめに

この春で本校勤続10年を迎える。人は節目に来ると過去を振り返るものだが、自分の教員歴は、ニューヨークの公立高校で教壇に立った経験を抜きに語ることはできない。たった1年の間であったが、貧困や治安の悪さで悪名高いブロンクスという地域で、英語もたどたどしい日本人が移民の子どもに英語を教えるという型破りな設定、あの頃ほどがむしゃらになった時期はない。教員生活の1年目、慣れない環境で生徒とぶつかり、生徒を憎んでいた自分に対し、生徒たちの方から心を開いてくれた。子どもたちから多くを教えられた1年間で、その経験は今の教員生活の基盤となっている。本校奉職10年の節目、自分のブロンクスでの経験をつづってみたい。

私がブロンクスで教職についていたのは、1999年秋から2000年夏までで、すでに13年の月日が経っている。そして今回紹介するのは、このたび部屋を整理して掘り起こした当時の email の電子データである。日々の生活に悪戦苦闘する中、さまざまな出来事や思いをつづったもので、日本語で日本の友人に、英語でアメリカ人の友人に送付している。



(写真 <http://insideschools.org>)

勤務校の校舎

ニューヨーク屈指のマンモス校。退学率の高さに教育長が激怒し、2006年廃校。現在は6つの学校が利用しているらしい。

ブロンクスとは

ブロンクス (the Bronx) とは、マンハッタンからハーレム川を挟んだ対岸にあるニューヨーク市北部の行政区 (borough) である。第一次世界大戦後、地下鉄の開通でアイルランド系の移民が急増したが、禁酒法の時代に密造業者やギャングのはびこる地域となり治安が悪化、富裕層が郊外に出て行ってしまった。60年代からはプエルトリコ、ドミニカ共和国などからのヒスパニック系移民が急増した。若者ギャングの抗争を描いた映画、West Side Story が公開されたのはこの頃である。同時に都市開発に乗り遅れ生活水準が急激に低下し、保険金を目当てとした放火が横行したそうで、今日でも崩れか

— 執 筆 者 紹 介 —

柳 本 博 …………… 国 語 科 教 諭
原 田 淳 …………… 英 語 科 教 諭
川 部 瑠衣子 …………… 英 語 科 教 諭
間 嶋 剛 …………… 国 語 科 非 常 勤 講 師
小 林 雄 佑 …………… 国 語 科 非 常 勤 講 師

紀 要 委 員

兼 田 信一郎 原 田 淳
高 畑 義 憲

研究紀要 第 27 号

平成25年3月25日 発行

発行者 東京都文京区関口3丁目8番1号
獨協中学・高等学校 紀要委員会

印刷所 東京都北区王子本町2丁目5番4号
株式会社 王 文 社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 27

2013

Contents

Articles :

20XX ; An Art Odyssey Hiroshi YANAGIMOTO ... 1

Language, Thought, and Culture

—A Brief Insight into Their Relations— Ruiko KAWABE ... (23)

Educational Practice Report :

The Bronx State of Mind Jun HARADA ... (1)

Practical method of reading aloud with "Shippai-En" by Osamu Dazai

..... Takeshi MAJIMA • Yusuke KOBAYASHI ... 21

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014